





テ不動産賣買讓渡質入書入等ニ限り其證書又ハ願書ニ親族連署ノ上ナラテハ戶長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様相定メ其旨指令及ヒ度右ハ未タ成規モ無之此段相伺候也  
明治十六年五月三十日  
内務卿山田顯義

太政大臣三條實美殿

〔朱書〕

伺之趣聞届候事

明治十六年七月三日

●滋賀縣伺 (十六年七月二十六日)

本年七月十八日内務省達番外ヲ以テ後見人職務權限之儀即チ不動産賣買讓渡質書入等ニ限り其證書又ハ願書ニ親屬連署ノ上ナラテハ戶長ニ於テ公證ヲ與ヘサル様太取官へ經伺ノ旨達相成候處記名公債證書ヲ賣讓渡等ノ節モ同様親族連署ノ上ハ公債掛檢印ヲ與ヘサル様可取計哉右ハ幼者後來ノ利害ニ關シ且後見人職權上同轍ニ付此段相伺候也

○内務大藏兩省指令 (十六年八月十八日)

伺之通取計フヘキ儀ト心得ヘキ事

●富山縣伺 (十九年十二月七日)

幼戶主ノ後見人ハ親族協議ノ上撰任スヘキ處其親族ナキカ或ハ是レアルモ未丁年者ナルキハ其町村戶長ヲシテ適宜後見人ヲ撰定セシメ候テ可然哉果シテ然ラハ幼戶主所有ノ不動産賣買讓渡書入質入等ノ場合モ後見人ノミ署名セシ證書ニ對シ戶長ニ於テ公證附與爲致可然乎

○司法省指令 (十九年十二月二十二日)

伺之通

●靜岡縣伺 (二十年一月六日)

茲ニ同居ノ幼年戶主ノ後見人自己地方稅ニ係ル營業ヲ廢シ自ラ後見スル處ノ幼戶主へ營業物品ヲ賣渡シ幼戶主買受タル旨ニテ同業ヲ營ムモノアリ抑後見人ハ其後見ヲ受ル者ノ財産ヲ買受クルヲ得サルハ勿論又後見人ハ自己財産ヲ其後見ヲ受クルモノニ賣渡スヲ得サルモノト被考候果シテ然ラハ親族協議ノ如何ニ拘ハラズ後見人ト其後見ヲ受クル幼年者トハ動産不動産ヲ間ハス相互賣買ノ契約ヲ爲スヲ得サルモノトシ既ニ賣渡シタル物品ハ更ニ爲引戻可然乎

○司法省指令 (二十年二月三日)

登記



伺之趣後見人ハ其後見ヲ受ケル幼年者ト動産不動産ヲ問ハス相互ニ賣買ノ契約ヲ爲スヲ得サルモノナリト雖モ既ニ賣渡シタル物品ヲ爲引戻候儀ハ裁判所ノ處分ヲ仰カシム可キ儀ト心得ヘシ

●静岡縣伺 (二十年一月二十一日)

後見人ニシテ被後見者ノ土地家屋ヲ買受讓受等ノ儀ハ親族協議濟ト雖モ不差許儀ト心得可然乎之旨明治十七年四月三十日本縣第七百七十九號ヲ以テ内務省ヘ相伺候處同年五月十二日付ヲ以テ伺之通ト御指令有之右ハ不公正ノ嫌疑ナキヲ保スル儀ニ可有之就テハ後見人已カ子弟及ヒ親族ヘ被後見者所有ノ土地家屋ヲ買受讓受サセ候儀モ不可差許儀ニ可有之乎果シテ然ラハ自己又ハ子弟親族所有ノ土地家屋ヲ被後見者ニ買受讓受サセ候儀モ隨テ不相成儀ト心得可然乎

○司法省指令 (二十年二月四日)

伺ノ趣後見人ト同居ノ子弟親族ニ限り被後見者ト互ニ賣買讓與不相成儀ト心得可シ

●福岡縣伺 (二十年六月二十一日)

地所船舶賣買讓與ニ際シ附帶ノ契約即チ年期買戻等ノ契約アリテ登記簿ニ登記

シアルモノハ該物件ニ對シ公賣處分ヲナストキ關係人ヘ通告スヘキ筋ト被相考候得共右ハ明治十年第七十九號布告第一條但書及十六年太政官第十六號達ノ範圍外ニシテ他ニ成文無之ニ付若シ其通知ヲ怠リ處分ヲ決行セシ後關係人ヨリ不納金辨納ノ義申出ツルト雖モ公賣處分ヲ取消スヘキ者ニ無之義ト相心得可然乎  
○内務大藏司法三省指令 (二十年七月七日)  
伺之通

但附帶ノ契約アルモノハ公賣ノ際公告ニ明記スヘシ

●鹿児島縣伺 (二十年一月十九日)

登記法ト證券印稅トハ矛盾セサル儀ト心得ヘキヤ

○大藏省指令 (二十年二月一日)

申出ノ通

●岡山縣伺 (二十年二月五日)

本年二月以降登記法實施ニ付テハ船舶賣買讓與等ハ總テ登記濟ノモノニ非サレハ鑑札下附書換ヲ爲サル儀ト相心得然ルヘキ哉

○大藏省指令 (二十年二月十七日)

登記



何ノ趣登記ノ濟否ニ拘ハラズ直チニ鑑札書換下附可致儀ト可相心得事

○第五節 證券印稅規則

明治十七年五月一日  
第十一號布告

○沿革略記

明治六年二月第五十六號布告ヲ以テ諸證文印紙貼用規則ヲ制定同年六月一日ヨリ施行ス○同七年七月第八十一號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ更ニ證券印稅規則ヲ制定同年九月一日ヨリ施行ス但シ同則中帳簿罰則ハ八年一月一日ヨリ施行セリ○同八年七月第二十號布告ヲ以テ人民ヨリ各應ニ差出ス受買并約定筋ニ涉ル書類ニ證券印紙界紙ノ用方モ本則ニ據ラシム○同十七年五月第十一號布告ヲ以テ前令ヲ改正同年七月一日ヨリ施行ス即チ現行ノ規則是ナリ

明治七年七月第八十一號布告證券印稅規則別冊ノ通改正シ明治十七年七月一日ヨリ施行ス

但明治八年七月第二百二十號布告ハ同日ヨリ廢止ス  
右奉 勅旨布告候事

〔別冊〕證券印稅規則

第一條 凡ソ財産ノ授受及ヒ契約ノ證明ニ用フル證書帳簿ハ此規則ニ循ヒ印紙ヲ貼用スヘシ

第二條 證書帳簿ヲ分テ二類ト爲シ其稅率ハ左ノ如シ

第一類

- 左ニ掲クル所ノ證書帳簿ハ金高ノ有無多寡ニ拘ハラズ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ但當座預リ金引出小切手ハ大藏省ニ稅印ノ押捺ヲ請フコトヲ得
- 一 當座預リ金引出小切手 印稅五厘
- 一 委任狀 同 五厘
- 一 金高記載ナキ約定證文 同 壹錢
- 一 遺物證文 同 壹錢
- 一 跡式讓證文 同 壹錢
- 一 讓與證文 同 壹錢
- 一 期限ヲ定メサル預リ金證文 同 壹錢
- 一 耕地小作證文 同 壹錢

登記



- 一 雇人請合狀 同 壹 錢
- 一 金高記載ナキ諸物品預リ證文 同 壹 錢
- 一 金高記載ナキ諸物品借用證文 同 壹 錢
- 一 地所預リ證文 同 壹 錢
- 一 諸物品切手 同 壹 錢
- 一 借地證文 同 壹 錢
- 一 賣買仕切書 同 壹 錢
- 一 保險證文 同 壹 錢
- 一 諸會社株券 同 壹 錢
- 一 送金手形 同 壹 錢
- 一 金 錢 通帳 一年以内 同 壹 錢
- 一 諸物品通帳 一冊ニ付 同 壹 錢
- 一 諸物品判取帳 同 貳拾 錢
- 一 結社約定書 同 壹 錢

但結社約定書ニ金圓授受貸借ニ係ル條項アリテ之カ効力ヲ確定スル證書帳簿ハ金高記載ナシト雖モ第二類金高記載アル諸般ノ契約證書ニ準シ印紙ヲ貼用スヘシ

左ニ掲クル所ノ證書ハ金高五圓以上ノモノニ限り下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

- 一 營業ニ關スル送狀 印稅壹 錢
- 一 營業ニ關スル請取書 同 壹 錢

右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ總テ一年以内壹冊ニ付壹錢ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第二類

左ニ掲クル所ノ證書ハ金高ノ多寡ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用スヘシ但爲換手形約束手形ハ手形用紙ヲ用フヘシ



一金錢借用證文

一地所家屋賣買證文

一金高記載アル諸物品預リ證文

一金高記載アル諸物品借用證文

一諸物品賣買證文

一金錢定期預リ證文

一金高記載アル諸般ノ契約證書

金高壹圓以上貳十圓未滿

印稅壹錢

金高貳拾圓以上五拾圓未滿

同貳錢

金高五拾圓以上百圓未滿

同四錢

金高百圓以上百五拾圓未滿

同六錢

金高百五拾圓以上貳百圓未滿

同八錢

金高貳百圓以上三百圓未滿

同拾壹錢

金高三百圓以上四百圓未滿

同拾四錢

金高四百圓以上六百圓未滿

同貳拾錢

金高六百圓以上八百圓未滿

同貳拾六錢

金高八百圓以上千百圓未滿

同三拾貳錢

金高千百圓以上千四百圓未滿

同三拾八錢

金高千四百圓以上千七百圓未滿

同四拾四錢

金高千七百圓以上貳千圓未滿

同五拾錢

金高貳千圓以上貳千五百圓未滿

同六拾錢

金高貳千五百圓以上三千圓未滿

同七拾錢

金高三千圓以上三千五百圓未滿

同八拾錢

金高三千五百圓以上四千圓未滿

同九十錢

金高四千圓以上

同壹圓

右諸證書ヲ通帳ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル

登記



所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

金高百圓未滿

印稅四錢

金高百圓以上總テ諸證書稅率ニ據ルヘシ

一金錢當座預リ證文

一質物預リ書  
小札

金高壹圓以上貳拾圓未滿

印稅壹錢

金高貳拾圓以上

同貳錢

右諸證書ヲ通張ト爲ストキハ其附込見積金高ニ隨ヒ下ニ定ムル所ノ印紙ヲ貼用スヘシ

金高百圓未滿

印稅貳錢

金高百圓以上

同四錢

一爲替手形

一荷爲替手形

一約束手形

金高五拾圓未滿

印稅壹錢

金高五拾圓以上百圓未滿

同貳錢

金高百圓以上貳百圓未滿

同四錢

金高貳百圓以上五百圓未滿

同八錢

金高五百圓以上千圓未滿

同拾五錢

金高千圓以上貳千圓未滿

同貳拾五錢

金高貳千圓以上

同五拾錢

第三條 前條ニ掲クル所ノ證書帳簿ト効用ヲ同フスルモノハ其

名稱ニ拘ハラス稅率ニ照シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第四條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニシテ第五條ノ手續ニ循ヒ

印紙ヲ貼用セサルモノハ民事裁判上之ヲ受理セス但處罰ヲ受

クル後印紙ヲ貼用シタルモノハ此限ニ在ラス

登記



第五條 印紙ハ證書ノ差出人又ハ帳簿主ニ於テ證書ハ授受ノ前

帳簿ハ使用ノ前ニ貼用シ證書帳簿記名ノ下ニ押捺スル印ヲ以

テ證書帳簿ノ紙面ト印紙ノ彩紋トニカケテ消印スヘシ

第六條 印紙及ヒ手形用紙ノ種類定價ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第七條 印紙及ヒ手形用紙ハ官ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ非サレ

ハ之ヲ賣捌クコトヲ得ス

第八條 印紙ヲ貼用スヘキ帳簿仕切書送り狀ハ主任官之ヲ検査

スルコトアルヘシ

第九條 左ニ掲クル所ノ證書帳簿ハ印紙ヲ貼用スルコトヲ要セ

ス

一官廳ヨリ差出ス證書帳簿

一官吏準官吏若クハ布告布達又ハ達ヲ以テ定メタル議員若ク

ハ公立學校病院ニ從事スルモノ各其職務ニ依テ用フル證書

一國庫金取扱所又ハ爲替方ヨリ官廳ニ差出ス預リ金ニ對スル

抵當證書

一國庫金取扱所又ハ爲替方ヨリ官廳ニ對シタル諸上納金ノ預

リ證書帳簿

一金員記載アル官廳ヨリノ命令書ニ對シ國庫金取扱所又ハ爲

替方ヨリ差出ス證書

一諸上納金ニ付國庫金取扱所又ハ爲替方ヨリ納人へ差出ス請

取證書

一罹災救助献金寄附金ニ關シ人民ヨリ官廳ニ差出ス證書

第十條 第二類ノ帳簿ハ初丁へ附込見積金高及ヒ使用期限紙數

ヲ記載スヘシ但物品ノ授受ニ關スルモノハ其代價ヲ記載スヘ

シ

第十一條 證書帳簿ニ税率ノ異ナルモノヲ雜記スルトキハ各相

登記



當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十二條 印紙貼用濟第二類ノ帳簿見積金高又ハ使用期限ノ満チタルトキハ其旨該帳簿ニ記載シ置キ主任官檢査ノ節之レニ檢印ヲ受クヘシ

第十三條 前條ノ帳簿餘白アリテ尙ホ之ヲ使用セントスルトキハ第十條ノ手續ヲ以テ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十四條 第二類ノ帳簿見積金高未タ滿タサルカ又ハ使用期限未タ盡キサルニ紙數盡キタルトキハ更ニ紙數ヲ増加スルコトヲ得此場合ニ於テハ其帳簿初丁見積金高又ハ期限ノ側ニ其事由及ヒ増加シタル紙數ヲ記載スヘシ

第十五條 證書帳簿ニ外國貨幣ヲ以テ員數ヲ記載スルトキハ內國ノ貨幣ニ改算シタル金高ヲ附記シ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ  
第十六條 取換セ證書ハ雙方トモ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十七條 證書ニ副證書ヲ附シ又ハ裏書等ヲ爲シ本證書ト効用ヲ異ニスルモノ若クハ金高ニ増減ヲ生スルモノハ其副書又ハ其裏書ニ就キ更ニ相當ノ印紙ヲ貼用スヘシ

第十八條 此規則ヲ犯シ脱税ニ係ルモノハ處罰ヲ受クル後證書帳簿ノ受取人ニ於テ相當ノ印紙ヲ貼用スルコトヲ得

第十九條 印紙ヲ貼用スヘキ證書帳簿ニ之ヲ貼用セス若クハ貼用不足スルモノ及ヒ手形用紙ヲ用ヒス若クハ不足税ノ手形用紙ヲ用ヒタルモノハ脱税高二十倍ノ料料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十條 第十八條ノ場合ヲ除ク外第五條ノ手續ニ據テ消印ヲ爲サス又ハ他ノ印ヲ以テ消印シタルモノハ印税高十倍ノ料料又ハ罰金ニ處ス其證書帳簿ヲ受取タルモノ亦同シ

第二十一條 此規則ヲ犯シタル證書帳簿ニ請人證人トシテ加印



シタルモノハ此正犯ニ係ル科料罰金ノ半額ニ相當スル科料又ハ罰金ニ處ス

第二十二條 第八條ノ證書帳簿ノ檢査ヲ拒ミタルモノハ貳圓以上貳拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十三條 第十條及ヒ第十三條ヲ犯シタルモノハ貳圓以上拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十四條 第十二條及ヒ第十四條ヲ犯シタルモノハ壹圓以上壹圓九十五錢以下ノ科料ニ處ス

第二十五條 第七條ヲ犯シタルモノハ所持ノ印紙及ヒ賣得金ヲ沒收シ五圓以上五拾圓以下ノ罰金ニ處ス

第二十六條 前數條ノ罪ヲ犯シタルモノハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

○第十五項 官廳宛諸證書類ニ印紙誤貼用取直方明治七年七月

八日第八十六號達

人民ヨリ官廳へ宛テ差出候諸證書類ニ萬一印紙ヲ貼用セス又ハ消印セサル節過誤ニ涉ル分ハ一旦下ケ戻シ取直サセ不苦候條此旨相達候事

但人民相互ニ爲取替濟ノ證書ヲ官廳へ差出候分ハ此限ニアラス

○第十六項 證券印紙及ヒ手形用紙種類定價明治十七年五月一日第

十二號布達

今般第拾壹號布告ヲ以テ證券印稅規則改正候ニ付テハ印紙及ヒ手形用紙ノ種類定價左ノ通相定ム

但印紙ハ當分ノ内新舊取交貼用スルコトヲ得

印紙

赭色	定價五 厘
橙黃色	同 壹 錢
黃綠色	同 貳 錢
萌黃色	同 五 錢
桔梗色	同 拾 錢

登記



青色	同 貳拾五錢
淡黑色	同 五拾錢
赤色	同 壹圓
手形用紙	定價壹錢
老綠色	同 貳錢
桔梗色	同 四錢
淡黑色	同 八錢
橙黃色	同 拾五錢
淡赭色	同 貳拾五錢
淡紅色	同 五拾錢
淡青色	同 五拾錢

右布達候事

○第三編 訴訟 自第一章 至第二章

○第一章 代言公證 自第一節至第二十一節

○第一節 代言人規則 明治十三年五月十三日 司法部甲第壹號布達

○沿革略記 明治九年二月司法部甲第壹號布達ヲ以テ代言人規則ヲ定メ免許ヲ經サル者ヘ代言依頼スヘカラサルモノトス○同十三年五月司法部甲第壹號布達ヲ以テ前例ヲ改正ス則チ現行規則是レナリ

明治九年當省甲第壹號代言人規則左ノ通改正候條此旨布達候事但該規則ニ牴觸スル從前ノ布達ハ總テ廢止タル可シ

代言人規則

第一款 總則

第一條 代言人ハ法令ニ於テ代言ヲ許サレタル詞訟ニ付テ原告又ハ被告ノ委任ヲ受ケ其代言ヲ爲ス者トス

第二條 代言ノ業ヲ爲サント欲スル者ハ第四款ニ掲クル所ノ手續ニ依リ定式ノ試験ヲ經テ司法卿ノ免許ヲ受ク可シ

代言



第三條 免許ヲ受ケシ代理人ハ大審院及ヒ諸裁判所ニ於テ代言  
ヲ爲スヲ得

第四條 代言人ノ免許ヲ得ル能ハサル者左ノ如シ

一 未丁年者

二 身代限リノ處分ヲ受ケ未タ辨償ノ義務ヲ終ヘサル者

三 盜罪詐僞罪ニ付刑ヲ受ケタル者

四 懲役禁獄一年以上ノ刑ニ處セラレタル者〔十四年司法省甲第  
二號布達ヲ以テ本

項ヲ改  
正ス

五 官吏准官吏及ヒ公私ノ雇人

第五條 免許ヲ受ケシ者ハ必ス第二款ニ掲クル所ノ代言人ノ組

合ニ入りテ其規則ヲ守ル可シ若シ一時他管ニ出テ代言ヲ爲ス

ルハ其地組合ノ規則ヲ遵守ス可シ

第六條 代言人新ニ免許ヲ受ケシ時及ヒ他ノ地ニ轉住セント欲

スル時ハ其業ヲ爲ス所ノ裁判所及ヒ檢事檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ  
攝行スル者以下之レニ做フ

並ニ議長ニ其旨ヲ届ケ廢業ノ時ハ免許狀ヲ檢事ニ返納ス可

シ

第七條 代言免許ハ滿一年月ヲ以テ算スヲ以テ限トシ免許料ハ金拾圓

トス其業ヲ繼續セント欲スル者ハ毎年免許料ヲ納ム可シ既ニ

納メタル免許料ハ廢業停業除名ノ時ト雖モ之ヲ還付セス

第八條 新規出願ノ者ハ免許狀ヲ受ル時免許料ヲ直チニ檢事ニ

納ム可シ

引續出願ノ者ハ必ス免許期限ノ盡ル前願書ニ免許料ヲ添ヘ檢

事ニ差出ス可シ但シ右手續ヲ爲シタルトキハ期限後ニ係リ未

タ免狀ノ下付有ラサルモ其儘代言ヲ爲スヲ得可シ

第九條 免許料ヲ納メサルヲ以テ免許ヲ得ス又ハ期限前ニ於テ

引續願ヲ爲サスシテ免許ノ効ヲ失ヒシ者再ヒ代言ヲ爲サント



欲スル時ハ新規出願ノ手續ニ循フ可シ

第十條 免許狀ヲ紛失シ又ハ氏名ヲ改メシ者ハ更ニ免許狀下付ノ願ヲ檢事ニ出ス可シ但シ願書ノ副本ニ檢事ノ檢印ヲ受ケ置キ引替免許狀下附迄ハ之ヲ以テ免許代理人タルノ證ト爲ス可シ

第十一條 代言ヲ爲スニハ必ス詞訟本人ノ委任狀ヲ受ク可シ

第十二條 代言人ノ懲罰ハ第三款ニ依テ處分ス可シ

第十三條 代言人ノ所業ニ因リ生シタル詞訟本人並ニ相手方關係人ノ損害ハ其代言人ニ於テ之ヲ償フ可シ

第二款 議會

第十四條 代理人ハ各地方裁判所本支廳所轄毎ニ一ノ組合ヲ立テ議會ヲ設ケ左ノ目的ヲ以テ規則ヲ定メ契約ヲ固クス可シ但組合ハ各裁判區ノ廣狹遠近ニ依リ檢事ノ見計ヲ以テ之ヲ分合

審判所  
裁改  
稱ス

スルコトアル可シ

一 互ニ風儀ヲ矯正スル事

二 名譽ヲ保存スル事

三 法律ヲ研究スル事

四 誠實ヲ以テ本人ノ依頼ニ應スル事

五 強テ本人ノ權利ヲ捏造セサル事

六 妄リニ言詞ヲ變改セサル事

七 故ナク時日ヲ遷延セサル事

八 相當謝金ノ額ヲ定ムル事

但該規則ハ必ス檢事ノ照閲ヲ經過シ其改正増補モ亦之ニ同

第十五條 組合毎ニ會長一名副會長一名又ハ貳名ヲ毎年第一次會ニ於テ投票ノ多數ヲ以テ定ム可シ若シ投票ノ數相均シキ時

代言



ハ先キニ免許ヲ得タル者ヲ以テシ其時日相同シキ時ハ年長ノ者ヲ以テ之ニ充ツ可シ

第十六條 會長ハ議會ノ管理ヲ爲シ副會長ハ會長ヲ補助シ會長差支アル時ハ之カ代理ヲ爲ス可シ其任期ハ各滿一年トス但每期投票多數ヲ得ル者ト雖ヒ其職務ヲ繼續スルハ二期ヲ以テ限リトス

第十七條 第二十二條ニ記載シタル條件ヲ犯ス者アル時ハ各代  
言人ハ之ヲ會長ニ報告シ會長ハ之ヲ檢事ニ告發ス可シ  
若シ會長告發ヲ遷延シ又ハ其所犯會長ニ係ル時ハ各代  
言人ヨリ直チニ檢事ニ告發ス可シ

第十八條 議會ヲ開クハ毎年二次ヲ以テ定例ト爲シ其日數一次十五日ヲ過クルヲ得ス若シ已ムヲ得サル場合ニ於テ期日ヲ延サントスルカ又ハ臨時會ヲ開カントスル時ハ必ス檢事ノ認可

ヲ受ク可シ但其會費ハ各代  
言人ニ於テ之ヲ擔當スル者トス

第十九條 會長ハ組合總員ノ名簿ヲ作り其本貫族籍住所年齢及ヒ代言免許ノ年月日ヲ記シ轉住廢業懲罰ノ事アル毎ニ其旨ヲ記ス可シ

第二十條 議會中詞訟事件ニ付參會スルヲ得サル場合ニ於テハ其旨ヲ會長ニ届出ツ可シ

第二十一條 會長及ヒ副會長ト雖モ代言ノ職業ニ付テハ一般ノ代  
言人ト異ナルナシ

第三款 懲罰

第二十二條 代言人左ノ條件ヲ犯ス時ハ輕重ヲ量リ第二十三條及ヒ第二十四條ニ依テ懲罰ス可シ

- 一 訟廷ニ於テ現行ノ法律ヲ誹議スル者
- 二 訟廷ニ於テ官吏ニ對シ不敬ノ所業ヲ爲ス者



- 三 訟廷ニ於テ相手方ヲ陵辱罵詈ヲタル者
  - 四 詞訟ヲ教唆シタル者
  - 五 證據ト爲ル可キ者ヲ捏造シタル者
  - 六 他人ノ詞訟ヲ買取リ自己ノ利ヲ圖ル者
  - 七 強テ謝金ヲ前收シ又ハ過當ノ謝金ヲ貪リタル者
  - 八 故ラニ時日ヲ遷延シ詞訟本人並ニ相手方關係人ノ妨害ヲ爲シタル者
  - 九 議會組合ノ外私ニ社ヲ結ヒ號ヲ設ケ營業ヲ爲シタル者
  - 十 議會ニ於テ定メタル取締規則ヲ犯シタル者
- 第二十三條 懲戒ノ目次左ノ如シ
- 一 譴責
  - 二 停業
  - 三 除名

第二十四條 所犯法律ニ該ル者ハ法律ニ依テ處斷シ仍ホ第二十三條ノ罰目ヲ併科スルコトアル可シ

第二十五條 譴責ハ止マ呵責シテ業ヲ停メス停業ハ一月以上一年以下其業ヲ停メ除名ハ代名人名簿ノ名ヲ除キ三年ヲ經ルノ後ニ非サレハ復タ代名人タルヲ得ス若シ其所犯ノ情狀重キ者ハ終身之ヲ許サス

第二十二條ノ懲罰ヲ受ケタル者アルハ其旨ヲ裁判所ノ扣所ニ揭示ス可シ

第四款 出願

第二十六條 代言免許ヲ願フ者ハ第二十九條ノ書式ニ倣ヒ願書ヲ作り現住戸長又ハ區長ノ奥印ヲ受ケ履歷書ヲ添へ其所轄ノ檢事ニ差出シ定式ノ試験ヲ受ク可シ

第二十七條 出願定月



三月 八月 各上半ヶ月ヲ以テ限リト爲ス

第二十八條 試験ノ課目左ノ如シ

- 一 民事ニ關スル法律
  - 二 刑事ニ關スル法律
  - 三 訴訟ノ手續
  - 四 裁判ニ關スル諸規則
- 第二十九條 願書及ヒ履歷書書式

代言願

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄留所ヲ記入ス可シ

身分

氏

名

年 齡

代言營業仕度ニ付御試験之上免許被成下度此段奉願候也

年號月日

右

氏

名 印

司法卿某殿

前書ノ通出願候ニ付奥印致候也

右戸長 又ハ區長

氏

名 印

履歷書

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄留所ヲ記ス可シ

身分

職業

氏

名

年 齡

一地名身分何某ニ隨ヒ何年ヨリ何年迄何學修行何某ニ隨ヒ何技

代言



術ヲ修行

- 一 何年月日何〔官職〕ニ任シ何年何月〔免官辭職〕
  - 一 何年月日何々ノ廉ヲ以テ何廳ヨリ賞典ヲ受ク
  - 一 何年月日何々ノ犯罪ニ依リ何ノ刑ヲ受ク
  - 一 何年月日身代限リノ處分ヲ受ケ何年月日辨償ノ義務ヲ終フ
- 右之通ニ御座候也

年號月日

氏

名 印

代言引續願 免許狀紛失氏名改換ノ時ノ願書モ此式ニ倣フ可シ

引續代言營業仕度候ニ付免許狀御下付被下度此段奉願候也

本貫住所 寄留ナル時ハ其寄留所ヲ記ス可シ

免許代言人

年號月日

氏

名 印

司法卿某殿

○第一項 代言人取扱手續

明治十三年五月十三日司法省丙第八號諸裁判所檢事、府縣へ達

司法省明治九年二月第二十五號達代言人取扱手續左ノ通改正候條此旨相達候事

代言人取扱手續

- 第一條 代言ノ免許ヲ願フ者アル時ハ檢事 檢事ナキ地ハ檢事ノ職務ヲ攝行スル者 其願書及ヒ履歷書ヲ査閱シ若シ寄留ニテ履歷ノ願未分明ナラサル時ハ本管ニ照會シテ取調ヘタル上之ヲ試験シ一切ノ書類ヲ纏メ司法「卿」ニ進達スヘシ
- 第二條 試験問題ハ出願定月前司法「卿」ヨリ各地方ノ檢事ニ送付ス
- 第三條 檢事ハ司法「卿」ヨリ受クル所ノ問題ヲ以テ出願定月ノ半ヶ月間ニ試験ヲ行フヘシ

但試験ニ法律書籍ヲ携帶スルモ妨ケナシ其問題ニ之ヲ許サ、ル旨ヲ記セシ時ハ携帶ヲ禁スヘシ

第四條 大審院裁判所並檢事ニ於テハ代名人名簿ヲ製シ年月日ヲ詳ニシテ左ノ件件ヲ登錄スヘシ

- 一 氏名身分住所年齡
- 二 新規及ヒ引續免許

代言



三 住所移轉姓名改換及ヒ廢業免許狀紛失等

四 懲罰

第六條 代言人ハ總テ其地ノ檢事ニテ監視シテ代理人規則ニ照シテ之ヲ取扱フヘシ  
若シ犯則ノ者アル時ハ其處分ヲ裁判官ニ求ムヘシ訟庭ニ於テノ犯則ハ裁判官直  
チニ之ヲ處分シ後テ檢事ニ通知スヘシ

第七條 議會ノ規則ハ檢事之ヲ認許シ其副本ヲ司法「卿」ニ進達スヘシ〔十九年六月  
令丙第七號ヲ以テ(副本)ノ下(及ヒ會長副  
會長組合人ノ氏名簿)ノ十四字ヲ削除ス〕

第八條 代言人他ノ裁判所管内ニ轉住シ又ハ廢業スルキハ檢事ヨリ司法「卿」ヘ上  
申スヘシ尤モ廢業ノトキハ其免許狀返納スヘシ

第九條 免許狀紛失或ハ改名ニ係リ書換等ニテ更ニ下付ヲ願出ル者アル時ハ檢事  
ヨリ司法「卿」ヘ上申シ其免許狀下付ヲ得テ之ヲ本人ニ授與スヘシ但右出願ノ時  
其願書ノ寫ヘ檢印ヲナシテ本人ヘ與ヘ置クヘシ

第十條 檢事ハ免許料ヲ收領シタル上ニテ免許狀ヲ本人ニ授與スヘシ

第十一條 免許料ハ一月毎ニ司法省ヘ納ムヘシ〔十三年司法省丙第十號  
達ヲ以テ但書共改正ス〕  
但シ檢事所在ノ裁判所ハ該會計課ヘ交付スル義ト心得ヘシ

第十二條 代言人ノ處刑懲罰ハ其都度檢事ヨリ之ヲ司法「卿」ヘ上申スヘシ除名ノ  
時ハ其免許狀ヲ褫奪シテ返納スヘシ

第十三條 檢事ハ停業ノ罰ヲ受ケタル者ノ免許狀ニ某年月日ヨリ某年月日マテ停  
業シタル旨ヲ裏書シ檢事ヲシテ之レヲ本人ニ下付スヘシ

〔免許狀雛形畧之〕

○第二項 大學ニ於法律學卒業者代言免許方 明治十三年  
十一月二十

九日司法省丙第拾六號地方裁判  
所檢事、檢事アラサル各縣ヘ達

明治十二年五月司法省丙第七號達左ノ通改正候條此旨可相心得事

文部省所轄東京大學法學部ニ於テ法律學卒業ノ者代言人營業出願セシ時ハ明治十  
三年五月司法省甲第壹號布達改正代言人規則第二十七條出願  
期月第二十九條試驗  
課目ニ關セ  
ス免許狀授與候條右出願ノ節ハ卒業免狀ヲ檢査シ願書ニ其寫ヲ添ヘ進達可致此旨  
相達候事

但本文試驗ニ關スル者ノ外代言人規則ニ準據スルハ一般代言人ト異ナルナシ

○第三項 司法省變則法學卒業者代言免許方 明治二十年  
十二月十三

日司法省訓令第  
二十六號檢事ヘ

代言



司法省變則法學生徒卒業者代言營業ヲ出願セシトキハ代言人規則第二十七條第二十八條ニ關シテ免許狀ヲ授與スヘキニ付出願ニ際シ卒業證書ヲ檢査シ其寫ヲ願書ニ添ヘテ進達スヘシ

○第四項 代言人出願試驗執行月ヲ定ム

明治二十年十一月十四日司法省告示

代言出願人試驗ノ儀ハ自今出願ノ都度之ヲ爲サス毎年四月ヲ以テ執行ス

○第五項 詞訟又ハ勸解ニ付代人差出方

明治十七年二月二十四日司法省第壹號布

詞訟又ハ勸解ニ付已ムヲ得ス代人ヲ出サントスル者ハ親屬又ハ相當ノ者ヲ撰ミ管轄裁判所ノ許可ヲ受ク可シ但代人タル者同時ニ二人以上ヨリ二件以上ヲ受任シ其他不適當ノ所爲アリト認ムル時ハ裁判所ニ於テ之ヲ差止ムルコトアル可シ  
右布達候事

長崎縣伺 (十七年三月二十六日)

本年第壹號布達ヲ以テ詞訟代人規則改正相成候ニ付テハ從前ノ通代人ハ於區戶長公證スルニ不及儀トハ存候得共爲念此段相伺候也

○司法省指令 (十七年四月十四日)

伺ノ通

○新潟縣伺 (十七年五月五日)

人民ヨリ縣令及ヒ區長ニ係ル訴訟ニ付屬官ヲ以テ縣令並ニ郡長ノ代理トナシ一人ニテ之ヲ兼ルモ差支ヘナキヤ

○司法省指令 (十七年五月八日)

五月五日付伺人民ヨリ係ル訴訟ニ付テハ屬官一人ヲシテ縣令及ヒ郡長ノ代理ト爲シ兩職ノ區別ヲ立テ答辨ヲ爲サシムルハ苦シカラス

○福岡縣伺 (十七年五月十日)

詞訟代人裁判所へ出願ノ節戶長又ハ區戶ノ公證ニ及ハサルモ戶長ノ與書ヲ要スヘキヤ

○司法省指令 (十七年五月十五日)

詞訟代人ノ儀ニ付伺ノ趣ハ戶長ノ與書ヲ要セス

○第二節 公證人規則

明治十九年八月十一日法律第貳號同年同月十三日布告

朕公證人規則ヲ裁可シ茲ニ之ヲ公布セシム

公證



公證人規則

第一章 總則

第一條 公證人ハ人民ノ囑托ニ應シ民事ニ關スル公正證書ヲ作ルヲ以テ職務ト爲ス

第二條 公證人ハ法律命令ニ背キタル事件ノ公正證書又ハ他ノ官吏ノ作ル可キ公證書類ヲ作ルコトヲ得ス若シ之ヲ作リタルトキハ公正ノ効ヲ有セス

第三條 公證人ノ作リタル公正證書ハ完全ノ證據ニシテ其正本ニ依リ裁判所ノ命令ヲ得テ執行スル力アルモノトス但刑事裁判所ニ偽造ノ訴アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止ス可シ又民事裁判所ニ偽造ノ申立アルトキハ其證書ノ執行ヲ中止スルコトヲ得

第四條 公證人ハ治安裁判所ノ管轄地ヲ以テ受持區トシ其區内

ニ於テ司法大臣ノ認可ヲ受ケタル町村内ニ住居シ其住宅ニ役場ヲ設ケ役場ニ於テ職務ヲ行フ可シ但役場外ニ住居セントスルトキハ管轄始審裁判所ノ認可ヲ受ク可シ

已ムヲ得サル事件ニ付テハ受持區内ニ限り役場外ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第五條 各區内公證人ノ員數ハ司法大臣之ヲ定ム

第六條 公證人ハ司法大臣ニ隸屬シ控訴院長始審裁判所長ノ監督ヲ受クルモノトス

第七條 公證人其受持區内ニ於テハ區外人ノ爲メニモ職務ヲ行フ可シ但受持區外ニ於テハ何人ノ爲メニモ職務ヲ行フコトヲ得ス若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第八條 公證人ハ理由ナクシテ人民ノ囑託ヲ拒ムコトヲ得ス若シ之ヲ拒ミタルトキ囑託人ノ求メアレハ其理由ヲ記シテ渡ス



可シ

第九條 公證人ノ職務執行上ニ關シ不服アル者ハ管轄始審裁判所ニ抗告スルコトヲ得

第十條 公證人ハ公證人何某ト刻シタル方六分ノ役印ヲ作り其印鑑ニ氏名ヲ手書シ之ヲ管轄始審裁判所及治安裁判所ニ差出ス可シ

前項ノ印鑑ヲ差出サハル間ハ職務ヲ行フコトヲ許サズ若シ之ヲ行ヒタルトキハ其書類ハ公正ノ効ヲ有セス

第十一條 公證人已ムヲ得サル事故アリテ職務ヲ行フコト能ハサルキハ近隣ノ公證人ニ代理ヲ囑シ管轄始審裁判所ニ其旨ヲ届出可シ

第十二條 公證人ハ筆生ヲ置キ書類ヲ作ル補助ヲ爲サシムルコトヲ得

第十三條 公證人ノ作ル證書及謄本ノ用紙ハ某始審裁判所管内公證人役場ト刻シタル罫紙ヲ用フ可シ

第十四條 公證人ノ取扱フ可キ書類左ノ如シ

第一 原本 證書ノ本紙ニシテ公證人ノ保存スルモノ

第二 正本 原本ノ全文ヲ記シタルモノニシテ本文義務ノ執行ヲ裁判所ニ願出可キ旨ヲ其末尾ニ記載シタルモノ

第三 抄録正本 原本一部分ヲ記シ其末尾ニ前項ト同一ノ記載アルモノ

第四 正式謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第五 抄録正式謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノニシテ原本ニ代ヘ得可キモノ

第六 謄本 原本ノ全文ヲ寫シタルモノ

公證



第七 抄録謄本 原本ノ一部分ヲ抄寫シタルモノ

第八 見出帳 日々受授シタル書類ノ番號種類等ヲ順次ニ記入スルモノ

第十五條 原本其他書類ノ本書ハ役場ニ之ヲ保存シ他ノ官吏ノ公證ヲ受クル爲メノ外裁判所ノ命令ニ依ルニ非サレハ役場外ニ出スコトヲ得ス

第十六條 裁判所ノ命令ニ依ルノ外關係外ノ者ニ書類ノ謄本ヲ渡スコカラス

第十七條 公證人ハ其取扱ヒタル公證事件ヲ漏洩スコカラス

第二章 公證人ノ撰任及試験

第十八條 公證人タル可キ者ハ左ノ件々ヲ具備スルヲ要ス

第一 滿二十五歳以上ナル事

第二 身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ差入ル、事

第三 定式試験ノ及第證書ヲ有スル事但裁判官檢察官タリシ者及法學士法科大学卒業生代言人ハ此條件ヲ要セス

第四 丁年者二名以上ニテ其品行ヲ保證スル證書ヲ有セル事  
第十九條 保證金ノ額ハ土地ノ狀況ニ從ヒ貳百圓以上五百圓以下ニ於テ豫メ司法大臣之ヲ定ム

第二十條 左ニ掲クル者ハ公證人タルコトヲ得ス

第一 公權剝奪若クハ停止中ノ者

第二 盜罪詐欺罪賄賂收受ノ罪及贓物ニ關スル罪ヲ犯シ刑ヲ受ケタル者

第三 身代限ノ處分ヲ受ケ負債ノ辨償ヲ終ヘサル者

第四 官吏懲戒令ニ依リ免職セラレタル者

第二十一條 公證人ヲ試験スル場所及期日ハ司法大臣之ヲ定メ少クモ二箇月前ニ告示ス可シ



第二十二條 試験委員ハ控訴院若クハ始審裁判所ノ裁判官二名  
檢察官一名トシ司法大臣臨時之ヲ命ス

第二十三條 試験ノ科目ハ公證人規則民法、訴訟法、商法其他公  
證人ノ職務ニ關スル法律命令トス

第二十四條 公證人ヲラント欲スル者ハ願書ニ試験及第證書ノ  
寫ヲ添へ管轄始審裁判所若クハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ差出  
ス可シ但裁判官檢察官タリシ者ハ其官記法學士ハ其學位記法  
科大學卒業生ハ卒業證書代言人ハ其免許狀ヲ以テ及第證書ニ  
代フルコトヲ得

第二十五條 公證人ハ司法大臣之ヲ任ス

第二十六條 試験ノ方法ハ筆記口述ノ二種トス筆記試験ニ合格  
セサル者ハ口述試験ヲ受クルコトヲ得ス

第二十七條 試験及第者ニハ及第證書ヲ授與ス

第三章 證書

第一節 證書ノ原本

第二十八條 公證人證書ヲ作ルニハ其囑託人ノ氏名ヲ知り面識  
アルヲ必要トシ且丁年者一名ノ立會人ヲ要ス之ニ違ヒタルト  
キハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス  
公證人囑託人ノ氏名ヲ知ラス面識ナキトキハ其本籍或ハ寄留  
地ノ郡區長若クハ戸長ノ證明書又ハ公證人氏名ヲ知り面識ア  
ル丁年者二名以上ヲ以テ其人ヲ證セシム可シ之ニ違ヒタルト  
キハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第二十九條 左ニ掲クル者ハ立會人タルコトヲ得ス

第一 公證人及囑託人ノ親屬雇人又ハ公證人ノ筆生

第二 第二十條ニ掲ケタル者

第三十條 證書ニハ其本旨ノ外左ノ件々ヲ記載ス可シ



第一 公證人及立會人ノ族籍住所職業氏名年齢

第二 囑託人代理人ナルトキハ委任狀ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第三 囑託人後見人ナルトキハ後見人タルノ證書ヲ所持シタルコト及其本人ノ族籍住所職業氏名年齢

第四 郡區長戸長ノ證明書ヲ以テ證シタルトキハ其旨又證人ヲ要シタルトキハ其族籍住所職業氏名年齢

第五 證書ヲ作りシ場所及其年月日若シ場所ヲ記セス又ハ年月日ノ記入ヲ遺脱シタルトキハ其證書ハ公正ノ効ヲ有セス

第三十一條 證書ヲ作ルニハ普通平易ノ語ヲ用ヒ字畫明瞭ナルヲ要ス

接續ス可キ字行ニ空白アルトキハ黒線ヲ以テ之ヲ接續ス可シニ數量並ニ年月日ヲ記スルニハ壹貳參肆伍陸漆捌玖拾陌阡萬ノ

字ヲ用フ可シ

第三十二條 度量衡貨幣ノ數量名稱及曆法ハ法律ノ定ムル所ニ從ヒ之ヲ記ス可シ

既ニ廢シタル度量衡貨幣曆法又ハ外國ノ度量衡貨幣曆法ヲ記セサルヲ得サル場合ニ於テハ之ヲ用フルコトヲ得

第三十三條 證書ニ追加改正ヲ爲ストキハ其文字並ニ何行ニ追加改正ヲ爲シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人并ニ關係人捺印ス可シ又文中消字ヲ爲ストキハ其原字ノ尙ホ明カニ讀得可キコトヲ要ス且ツ何行ニ若干字ヲ消シタルコトヲ欄外又ハ末尾ノ餘白ニ附記シ公證人並ニ關係人捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ追加改正消字ノ効ヲ有セス

第三十四條 證書ヲ作りタルトキハ關係人ニ讀聞セ其旨ヲ記入シ然ル後ニ公證人並ニ關係人各自署名捺印シ公證人ハ某治安



裁判所管内某地住居ト肩書ス可シ

公證人並ニ關係人ノ署名捺印ナキトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

若シ署名スル能ハサル者アルトキハ明治十年第五十號ノ布告

十年第五十號布告

ニ從フ可シ之ニ違ヒタルトキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第一章第九節ニ揭

第三十五條 證書ノ綴目合目ニハ公證人並ニ囑託人之ニ捺印ス

可シ

第三十六條 公證人ハ自己及親屬ノ爲メニ證書ヲ作ルコトヲ得

ス其親屬他人ノ代理人タルトモ亦同シ之ニ違ヒタルトキハ其

證書ハ公正ノ効チ有セズ

第三十七條 公證人若シ囑託人ノ爲メ訴訟代人若クハ代言人ト

爲リ又ハ爲リタルコトアルトキハ其訴訟事件ニ付キ證書ヲ作

ルコトヲ得ス之ニ違ヒタルキハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第三十八條 公證人ハ自己親屬立會人又ハ證人ノ爲メニ利益ア

ル條件ヲ證書中ニ記ス可カラズ若シ之ヲ記シタルトキハ其條

件ハ無効トス

第三十九條 公證人ハ證書ノ原本ヲ保存ス可シ若シ之ヲ保存セ

ズ又ハ亡失シタル場合ニ於テ第四十七條ノ手續ヲ爲サ、ルト

キハ其證書ハ公正ノ効チ有セズ

第四十條 囑託人若シ代理人又ハ後見人ナルトキハ其委任狀又

ハ其證書ノ寫ヲ原本ニ連綴ス可シ其寫ニハ本書ト對照シ相違

ナキ旨ヲ附記シ公證人並ニ關係人署名捺印シ其寫ト本書トニ

割印ス可シ

第四十一條 證書ニ關係ノ書類ハ之ヲ原本ニ連綴スルコトヲ得

之ヲ連綴シタルトキハ其旨ヲ原本ノ欄外又ハ末尾ニ附記シ公

證人並ニ關係人捺印ス可シ

公證



證券印  
稅規則  
編第二  
章第五  
節二揭

第四十二條 原本ニハ證券印稅規則ニ定メタル印紙ヲ貼用ス可

第二節 正本及謄本

第四十三條 正本ハ數量ノ定リタル金錢其他換用物若クハ有價  
證券ノ支辨ニ限リ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ之ニ違ヒ  
タルトキハ正本ノ効チ有セス

正式謄本及抄録正式謄本ハ權利者ノ請求ニ依リ之ヲ渡ス可シ  
第四十四條 正本又ハ正式謄本ハ原本ト同時ニ又ハ原本ヲ作リ  
タル後ニ於テ之ヲ作ルコトヲ得原本ト同時ニ作ルトキハ關係  
人ノ面前ニ於テシ原本ヲ作リタル後ニ作ルトキハ更ニ義務者  
ノ立會ヲ以テス可シ義務者出席セサルトキハ正本又ハ正式謄  
本ヲ求ムル者ヨリ管轄始審裁判所ニ出願シ其命令ニ依テ他ノ  
公證人一員又ハ裁判所ノ裁判官檢察官又ハ書記一員ノ立會ヲ

以テ之ヲ作ル可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス  
裁判官ノ命令ニ依テ正本又ハ正式謄本ヲ作リタルトキハ其末  
尾并ニ原本ノ末尾ニ其旨ヲ附記シ其命令書ハ之ヲ原本ニ連綴  
ス可シ

第四十五條 正本又ハ正式謄本ヲ作ルトキハ第三十一條第三十  
三條第三十四條第三項及第三十五條ノ規定ニ依ル可シ

正本又ハ正式謄本ニハ權利者ノ氏名並ニ之ヲ作リタル年月日  
及場所ヲ記シ公證人並ニ義務者署名捺印ス可シ前條第一項ノ  
場合ニ於テハ公證人及他ノ公證人又ハ裁判所ノ官吏署名捺印  
ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効チ有セス

第四十六條 正本又ハ正式謄本ヲ渡シタルトキハ原本ノ末尾ニ  
其旨ト年月日トヲ附記シ權利者ヲシテ署名捺印セシム可シ

第四十七條 正本又ハ正式謄本ハ原本ノ亡失シタルトキ管轄始



審裁判所ノ認可ヲ經之テ原本トシテ保存ス可シ

第四十八條 數事件ヲ列記シ數人各自ニ關係ヲ異ニスル證書ハ  
權利者ノ請求ニ依リ其有用ノ部分ヲ抄録シテ正本又ハ正式騰  
本ヲ作ルコトヲ得

正本又ハ正式騰本ヲ渡シタル者ニハ更ニ抄録正本又ハ抄録正  
式騰本ヲ渡ス可カラス又抄録正本又ハ抄録正式騰本ヲ渡シタ  
ル者ニハ更ニ正本又ハ正式騰本ヲ渡ス可カラス之ヲ渡スト雖  
モ其効ヲ有セス

第四十九條 正本又ハ正式騰本ハ管轄始審裁判所ノ命令アルニ  
非サレハ再度之ヲ渡スコトヲ得ス之ヲ渡スト雖モ其効ヲ有セ  
ス

再度以上正本又ハ正式騰本ヲ得ント欲スル者ハ其事由ヲ具シ  
テ管轄始審裁判所ニ願出シ可シ管轄始審裁判所ハ原本ヲ保存

スル公證人ニ其正本又ハ正式騰本ヲ渡スコトヲ命スルコ  
トアル可シ

其正本又ハ正式騰本ニハ幾度ノ正本又ハ正式騰本ナルコトヲ  
末尾ニ附記シ公證人署名捺印ス可シ之ニ違ヒタルトキハ其効  
ヲ有セス

第五十條 抄録正本又ハ抄録正式騰本ハ總テ正本又ハ正式騰本  
ト同一ノ手續ニ依リ之ヲ作ル可シ其効力モ亦同シ

第五十一條 證書ノ騰本及其附屬書類ノ寫ハ關係人ノ求メニ應  
ジ之ヲ渡ス可シ

第五十二條 騰本ニハ原本ノ全文ヲ寫シ其末尾ニ騰本ト記シ公  
證人署名捺印ス可シ

第五十三條 抄録騰本ニハ原本ノ年月日及囑託人ノ族籍住所職  
業氏名ヲ記シ末尾ニ抄録騰本ト記シ公證人捺印ス可シ



第五十四條 管轄始審裁判所ノ命令ニ依リ關係外ノ者ニ謄本ヲ

渡シタルトキハ其命令書ヲ原本ニ連綴シ末尾ニ命令書ヲ受ケ

タル旨並ニ年月日ヲ附記シ受取人ヲシテ署名捺印セシム可シ

第三節 見出帳

第五十五條 公證人ハ見出帳ヲ作り記入前管轄始審裁判所ニ差

出シ綴目合目ニ其所長ノ官印ヲ受ク可シ

第五十六條 見出帳ニハ日々取扱ヒタル書類中ヨリ第三十一條

及第三十三條ノ規定ニ從ヒ左ノ件々ヲ記入ス可シ

第一 囑託人ノ住所氏名

第二 書類ノ番號種類

第三 書類ヲ取扱ヒタル年月日

第四節 兼任及書類ノ授受

第五十七條 公證人死去失踪免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シ

テ直ニ後任者ノ命セラレサル場合又ハ停職ノ場合ニ於テハ管

轄始審裁判所ハ近隣ノ公證人ニ命シテ其事務ヲ兼任セシム可

シ

役場ヲ廢シタルトキハ書類ノ引繼ヲ近隣ノ公證人ニ命ス可シ

第五十八條 前條ノ場合ニ於テ兼任者ナキトキ其他必要ト見認

ムル場合ニ於テハ管轄始審裁判所ハ直ニ其役場ノ書類ニ封印

ヲ爲ス可シ

第五十九條 公證人免職辭職轉職又ハ他ノ役場ニ轉シタル場合

ニ於テハ後任者又ハ兼任者ハ前任者ト立會ヒ書類ノ提要目錄

ヲ作り共ニ署名捺印シテ授受ス可シ

死去失踪其他ノ事故ニ因リ引渡人ナキ場合ニ於テハ後任者又

ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ提要目錄ヲ作り受

取ル可シ



書類封印後ニ命セラレタル後任者又ハ兼任者ハ管轄始審裁判所ノ官吏ト立會ヒ封印ヲ解キ提要目錄ヲ作り受取ル可シ  
後任者又ハ兼任者ハ提要目錄ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其目錄ノ寫一通ヲ管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十條 公證人停職ノ場合ニ於テハ兼任者ハ第五十九條ノ手續ヲ爲スニ及ハス書類ノ保存ハ停職者之ヲ擔當ス可シ  
兼任者ハ停職者ノ役場ニ於テ其職務ヲ行フ可シ

第六十一條 兼任者引繼ノ書類ヲ更ニ他ノ公證人ニ引渡ストキハ其命ヲ受ケタル日ヨリ三日以内ニ自己ノ引繼キタルトキノ目錄ニ依テ引渡ヲ爲シ其始末書ヲ作り受繼人ト共ニ署名捺印ス可シ

受繼人ハ始末書ヲ作りタル日ヨリ一月以内ニ其寫一通ヲ作り管轄始審裁判所ニ差出ス可シ

第六十二條 停職者復任スルトキハ管轄始審裁判所ヨリ兼任者ニ解任ヲ命ス可シ

第六十三條 前任者ノ作りタル原本ニ於テ後任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ其受繼人タル旨ヲ附記ス可シ

本任者ノ作りタル原本ニ依テ兼任者正本又ハ謄本ヲ渡ストキハ兼任者タル旨ヲ附記ス可シ

第四章 手数料及旅費日當

第六十四條 公證人ハ此章ニ定メタル程限ニ從ヒ囑託人ヨリ手数料及旅費日當ヲ受クルコトヲ得

第六十五條 手数料ハ原本一枚ニ付キ貳拾五錢正本及謄本ハ一枚ニ付キ拾錢但一行二十字二十行ヲ以テ一枚トシ十行以上ハ一枚十行以下ハ半枚ヲ以テ算ス

第六十六條 囑託人ノ求メニ依リ先ツ證書ノ草案ヲ渡シ後其原



本ヲ作リタルトキハ草案ノ手数料ヲ別ニ請求スルコトヲ得ス  
但其原本ヲ作ラサルトキハ原本手数料ノ半額ヲ受クルコトヲ  
得

第六十七條 公證人其役場ヨリ一里以外ノ地ニ往テ職務ヲ行フ  
トキハ往返トモ旅費トシテ一里毎ニ貳拾錢ヲ受クルコトヲ得  
其職務ヲ行フ爲メ或ハ災變ノ爲メニ其場所又ハ途中ニ滯留ス  
ルトキハ日當七拾錢ヲ受クルコトヲ得

第六十八條 兼任者本任者ニ代リテ其職務ヲ行フトキハ其手  
料ハ總テ兼任者之ヲ受ク可シ

第六十九條 手数料ノ外證券印紙並ニ郵紙ノ代價ハ囑託人ヨリ  
之ヲ受ルコトヲ得

第七十條 囑託人ノ求メアルトキハ手数料等ノ計算書ヲ與フ可  
シ

第七十一條 手数料等ニ係リ争ノ生シタルトキハ其金額ニ拘ハ  
ラス管轄始審裁判所ニ訴フ可シ

第五章 懲罰

第七十二條 公證人此規則ヲ犯シタル時ハ管轄始審裁判所ニ於  
テ第七十三條ヨリ第七十六條マテニ定メタル規定ニ依リ處分  
ス可シ

第七十三條 左ノ違犯ハ五十錢以上一圓九十五錢以下ノ過料ニ  
處ス

第八條ニ違ヒタル時

第十一條ニ違ヒタル時

第十三條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第一第二第三第四ノ規定ニ違ヒタル時

第三十一條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時



第三十二條ノ第一項ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第一項ニ違ヒ讀聞セシコトヲ記入セス又ハ肩書

ヲ爲サ、リシ時

第三十五條ニ違ヒタル時

第四十條ニ違ヒタル時

第四十一條ニ違ヒタル時

第四十二條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十六條ニ違ヒタル時

第五十二條ニ違ヒタル時

第五十三條ニ違ヒタル時

第五十四條ニ違ヒタル時

第五十五條ニ違ヒタル時

第五十九條ノ第四項ニ違ヒタル時

第六十一條ニ違ヒタル時

第六十三條ニ違ヒタル時

第七十四條 左ノ違犯ハ貳圓以上五圓以下ノ過料ニ處ス

第四十三條ニ違ヒタル時

第四十四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第四十五條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十八條ノ第二項ニ違ヒタル時

第四十九條第一項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第七十五條 左ノ違犯ハ五圓以上三十圓以下ノ過料ニ處ス

第二條ニ違ヒタル時

第七條ニ違ヒタル時

第十條ノ第二項ニ違ヒタル時



第二十八條ニ違ヒタル時

第三十條ノ第五ノ規定ニ違ヒタル時

第三十三條ニ違ヒタル時

第三十四條ノ第二項又ハ第三項ニ違ヒタル時

第三十六條ニ違ヒタル時

第三十七條ニ違ヒタル時

第三十八條ニ違ヒタル時

第三十九條ニ違ヒタル時

第七十六條 左ノ違犯ハ一月以上四月以下ノ停職ニ處ス

第四條ノ第一項ニ違ヒタル時

第十五條ニ違ヒタル時

第十六條ニ違ヒタル時

第十七條ニ違ヒタル時

第七十七條 公證人前數條ニ掲ケタル懲罰處分ニ對シ不服アル

片ハ管轄控訴院ニ抗告スルコトヲ得但抗告ハ其處分ノ執行ヲ  
停止スルノ効力ナキモノトス

第七十八條 公證人停職ニ當ル所爲三度ニ及ヒタルトキハ司法  
大臣其職ヲ免ス

第二十條ノ第一第二第三ニ記載シタル處分ヲ受ケ又ハ身許保  
證金ヲ差入レサルトキ又前項ニ同シ

第七十九條 公證人此規則ヲ犯シタルニ依リ他人ニ損害ヲ生セ  
シメタルトキハ之ヲ賠償ス可シ

○第六項 公證人規則施行條例

明治十九年八月三十  
日司法省令甲第二號

今般法律第二號ヲ以テ公證人規則制定相成候ニ付施行條例左ノ通之ヲ定ム

公證人規則施行條例

第一條 公證人ハ一受持區ニ五名以下ヲ置ケモノトス

公證



若シ公證人ノ員數不足スルハ受持區ニ依リテハ全ク之ヲ置カサルコトアル可シ  
第二條 公證人ハ其受持區内ニ於テ住居セント欲スル町村ヲ定メ其願書ヲ始審裁  
判所ニ差出シ控訴院ヲ經テ司法大臣ノ認可ヲ請フ可シ

始審裁判所長及控訴院長ハ公證人ヨリ差出タル住居願ニ意見ヲ附シテ之ヲ司法  
大臣ニ送達ス可シ

司法大臣ニ於テ公證人ヨリ願出タル住居ヲ認可セサルハ直チニ其住居ス可キ  
町村ヲ指定ス

第三條 公證人既ニ住居ノ認可ヲ受ケタル後火災其他ノ事故アリテ他ニ轉居セン  
トスルハ亦前條ノ手續ニ從フ可シ

第四條 公證人ノ役場ニハ公證人某役場ト記セル表札ヲ掲ク可シ  
役場ニハ成可ク倉庫又ハ堅牢ナル建物ヲ以テ書類保存ノ所ト爲スヲ要ス  
書類ハ常ニ書籍ニ藏メ非常持退ノ準備ヲ爲シ置ク可シ

第五條 公證人規則ニ從ヒ試験ヲ受ケント欲スル者ハ試験願書ニ履歷書ヲ添ヘ試  
験期日ノ告示アリタルヨリ試験期日一箇月前マテニ試験ヲ行フ控訴院若クハ始  
審裁判所ニ差出ス可シ

試験願書及履歷書ニハ本籍區長若クハ戶長ノ與書ヲ受ク可シ

第六條 試験ハ各所同時ニ之ヲ行フモノトス

第七條 試験委員ハ筆記試験ノ答按ヲ調査シ其合格不合格ヲ決定シタル後口述試  
験ヲ行フ可シ

筆記試験ニ合格セサル者ニ付テハ口述試験ヲ行ハス

第八條 試験問題答案ノ適否ハ試験委員ノ判斷ニ決スルモノトス  
試験ノ結果ハ筆記口述二種ノ總點ニ依リ之ヲ定ム可シ

第九條 試験委員ハ口述試験ノ大畧及試験全體ノ結果ヲ記錄ニ記載ス可シ

第十條 試験ニ及第シタル者ニハ試験委員ノ連署シタル及第證書ヲ授與ス可シ  
試験ヲ行フタル控訴院若クハ始審裁判所ハ試験及第人名簿ヲ製シ之ニ及第者ノ  
住所族籍氏名年齢及ヒ及第ノ年月日ヲ登錄ス可シ

第十一條 試験委員ハ試験ニ關スル一切ノ書類ヲ其試験ヲ行フタル始審裁判所若  
クハ控訴院ノ長ニ差出ス可シ

始審裁判所ニ於テ試験ヲ行フタルハ其裁判所長ハ及第者ニ關スル一切ノ書類  
ニ意見ヲ附シ控訴院ニ送致シ控訴院長モ亦意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ  
公證



控訴院ニ於テ試験ヲ行フタルトキハ前項ノ書類ニ控訴院長ノ意見ヲ附シテ司法大臣ニ差出ス可シ

第十二條 公證人タラント欲スル者ハ其願書ニ試験及第證書官記學位記卒業證書又ハ免許狀ノ寫及丁年者二名以上ニテ品行ヲ保證スル證書ヲ添ヘ之ヲ差出ス可シ

試験及第證書ヲ要セサル出願人ハ別ニ履歴書ヲ添フ可シ

第十三條 公證人願ヲ受タル始審裁判所ノ裁判所長及上席檢事ハ出願人ノ身上ニ付品行ノ正否理財ノ整否等詳細ノ取調ヲ爲シ控訴院ニ送致シ控訴院長及檢事長モ亦意見ヲ附シテ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十四條 公證人願書ヲ直チニ控訴院ニ差出タルトキハ控訴院長及檢事長ハ前條ノ取調ヲ爲シ且ツ意見ヲ附シ之ヲ司法大臣ニ差出ス可シ

第十五條 公證人願書ニハ其職務ヲ行ハント欲スル地ヲ明記ス可シ

第十六條 司法大臣公證人ヲ任スルハ辭令書ヲ其公證人ノ職務ヲ行フ可キ地ノ管轄控訴院及始審裁判所ヲ經テ本人ニ下付ス

控訴院及始審裁判所ニ於テハ公證人名簿ヲ備置キ公證人ニ任セラレタル者ノ住

所族籍氏名年齢及任地ヲ記録ス可シ

第十七條 公證人ニ任セラレタル者ハ身元保證金トシテ現金又ハ相當ノ價格アル公債證書若クハ日本銀行株券ヲ管轄始審裁判所ニ納ム可シ

第十八條 公證人ノ納ム可キ身元保證金ノ額ハ左ノ如シ

東京及大坂

金五百圓

他ノ地方ニ於テハ

人口貳拾萬以上アル受持區

金四百圓

人口貳拾萬未滿拾萬以上アル受持區

金三百圓

人口拾萬未滿アル受持區

金貳百圓

前項ノ金額ハ人口ニ増減アリト雖モ既ニ完納シタルモノハ之ヲ増減セス

第十九條 公證人ハ身元保證金ヲ管轄始審裁判所ニ完納セサル間ハ其職務ヲ行フコトヲ得ス

公證人任命ノ辭令書ヲ受取タルヨリ三十日以内ニ身元保證金ヲ完納セサルトキハ公證人規則第七十八條第二項ニ依リ司法大臣其職ヲ免ス

第二十條 公證人ノ身元保證金ハ公證人規則第五章ニ定メアル過料其他賠償ノ低公證



保ニ充ツルモノトス

第二十一條 過料賠償其他ノ事故ニ依リ身元保證金ノ全部又ハ一部ヲ減消シタル  
其ハ管轄始審裁判所長ハ速ニ保證金ヲ補充ス可キ旨ヲ公證人ニ命ス可シ

公證人保證金ヲ補充スルマテ始審裁判所長ハ假ニ職務執行ノ停止ヲ命スルヲ  
得此場合ニ於テハ速ニ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

公證人保證金補充ノ命令ヲ受ケ六十日ヲ過キ之ヲ補充セサルキハ始審裁判所長  
ハ控訴院ヲ經テ司法大臣ニ具申シ免職ノ處分ヲ請フ可シ

第二十二條 公證人他ノ役場ニ轉スル場合ニ於テ其保證金ニ不足ヲ生スレハ之ヲ  
補充セシメ若シ餘分アレハ之ヲ還付ス可シ

第二十三條 公證人其職務ヲ罷タルキハ身元保證金ヲ還付ス可シ

第二十四條 公證人死去失踪シ又ハ停職ノ處分ヲ受ケタルキハ管轄始審裁判所ハ  
控訴院ヲ經由シ其旨ヲ司法大臣ニ具申ス可シ

停職者復任シタルキモ亦前項ノ手續ニ從フ可シ

第二十五條 公證人死去失踪停職復任辭職免職又ハ轉職シタル時ハ始審裁判所及  
控訴院ハ其旨ヲ公證人名簿ニ記入ス可シ

第二十六條 公證人規則ニ定メタル懲罰處分ハ民事裁判所之ヲ管轄シ刑法及治罪  
法ノ例ヲ用ヒス

第二十七條 公證人試驗願書式履歷書式及公證人願書式ハ左ノ如シ

第一 公證人試驗願書式  
公證人試驗願 (將紙美紙)  
族籍 戶主嗣子又ハ二  
三男兄弟ノ別  
氏 名  
年 齡

私儀公證人試驗相受度此段奉願候也

現住所 氏 名 印  
年 月 日

某控訴院長誰殿 又ハ某始審裁判所長誰殿  
前書ノ通族籍年齡等相違無之候也

本籍 區長又ハ戶長印  
年 月 日

公證 二百四十五



第二 履歷書式

履歷書 (料紙並紙)

族籍

氏

名

年

齡

何年何月ヨリ何年何月迄府縣何某ニ就キ又ハ公私何學校何塾ニ於テ何學修業

一 何年何月何々 職業仕官進退賞罰等ニ關スル一切ノ件

一 公證人規則第二十條ノ各項ニ相觸候儀一切無之候

年月日

氏

名印

前書ノ通相違無之候也

本籍

年月日

區長又ハ戶長印

第三 公證人願書式

公證人願 (料紙並紙)

族籍 戶主嗣子又ハ二男兄弟ノ別

氏

名

年

齡

私儀何府縣何國某治安裁判所管下公證人受持區ニ於テ公證人ノ職務ヲ行ヒ度志願

ニ有之候ニ付御登用被下度試驗及第證書(官記學位記卒業證書免許狀)ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

現住所

年月日

氏

名印

司法大臣誰殿

又

私儀何府縣何國某治安裁判所管下及何府縣何國某治安裁判所管下(某始審裁判所管

下又ハ其控訴院管下)ノ内何レノ公證人受持區ニ於テナリトモ御命令ニ從ヒ公證人ノ職務ヲ行ヒ度志願ニ有之候ニ付御登用被下度試驗及第證書(官記學位記卒業證書免許狀)ノ寫及ヒ品行保證書相添此段奉願候也

前後ノ式ハ前式ニ同シ

○第七項

登記法及公證人規則ニ對スル抗告手續

明治十九年十

一月九日司法省令甲第三號

公證



今般法律第一號第二號ヲ以テ登記法及ヒ公證人規則制定相成候ニ付其抗告手續左ノ通之ヲ定ム

抗告手續

第一條 登記官吏又ハ公證人ノ職務執行ニ關シ抗告ヲ爲ス者ハ抗告狀ヲ其登記官吏又ハ公證人ニ差出スヘシ

第二條 登記官吏又ハ公證人抗告狀ヲ受取リタルトキハ其翌日ヨリ三日以内ニ意見ヲ付シ且ツ關係書類ノ寫ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致スヘシ

第三條 登記官吏又ハ公證人若シ前條ノ期限内ニ抗告狀ヲ管轄始審裁判所ニ送致セサルトキ又ハ急速ヲ要スル場合ニ於テハ抗告者ハ直チニ管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スヘシ

始審裁判所ハ抗告ヲ受ケタル登記官吏又ハ公證人ヲシテ意見書ヲ差出サシメ及ヒ關係書類ヲ求ムルヲ得

第四條 登記官吏又ハ公證人ハ其職務執行上ニ關シ抗告ヲ受ケタルトキハ其處分ヲ停止スヘシ

第五條 抗告狀ヲ受取タル管轄始審裁判所ハ書面ニ依リ判定ヲ爲スヘシ

始審裁判所ハ必要ナリト認ムル場合ニ於テハ抗告者其他關係人ニ書面ヲ以テ答辨セシムルヲ得

第六條 始審裁判所ハ抗告ノ判定書ヲ管轄治安裁判所ニ送致シ之ヲ登記官吏又ハ公證人及ヒ抗告者ニ送付セシムヘシ

始審裁判所ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルトキハ登記官吏又ハ公證人ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正スヘシ

第七條 公證人懲罰處分ニ對シ不服アルモノハ其處分ノ翌日ヨリ起算シ七日内ニ其處分ヲ爲シタル管轄始審裁判所ニ抗告狀ヲ差出スヘシ

裁判所ハ其抗告ヲ正當ナリト認ムルトキハ速ニ其不服ノ點ヲ更正スヘシ若シ之ヲ正當ナラスト認ムルトキハ第二條ノ期限内ニ意見ヲ付シ關係書類ヲ添ヘ抗告狀ヲ管轄控訴院ニ送致スヘシ

第八條 公證人罰懲處分ニ對スル抗告ニ付テモ亦第三條ノ手續ニ依ルヲ得

第九條 公證人罰懲處分ニ對スル抗告狀ヲ受取タル控訴院ハ第五條ノ手續ニ從ヒ判定ヲ爲スヘシ

第十條 控訴院ハ其判定書ヲ處分ヲ爲シタル始審裁判所ニ送致シ之ヲ言渡サシム

公證



ヘシ  
控訴院ニ於テ抗告ヲ正當ナリト判定シタルキハ處分ヲ爲シタル始審裁判所ハ其判定ニ依リ處分ヲ更正スヘシ

第十一條 抗告ノ判定ニ對シテハ總テ上訴ヲ爲スヲ得サルモノトス

○第二章 出訴 自第一節至第二十一節 自第一項至第三十三項

○第一節 出訴期限規則 明治六年十一月五日 第三百六拾二號布告

金穀貸借ヲ始メトシ物品賣買ヨリ其外種々ノ取引等ニ至ルマテ 雙方ノ者互ニ受取渡ノ期限ヲ定メ條約ヲ結ビ置キタルニ一方ノ者其條約ヲ破リタル時ハ早速裁判所へ出訴イタシ不苦候處延期ノ勘辨ヲ加へ出訴ヲ見合候者モ有之是亦慈愛ノ人情ニテ尤ノ事ニ付早速出訴イタシ候トモ又ハ勘辨ヲ加へ候トモ人民ノ自由ニ任セ出訴期限ノ法則不相定候處右延期勘辨中數多ノ歲月ヲ過去リ出訴致シ候時ハ貸方借方請人證人ノ内死亡又ハ轉住又ハ失踪

等ノ者モ有之事理曖昧ニ立至リ裁判上不都合不少候ニ付訴訟ノ事柄ニ因リ夫々出訴ノ期限ヲ定候條來明治七年一月一日ヨリ後ニ結ビタル條約期限ニテ右出訴期限ヲ過去リ出訴セサル者ハ自分條約ヲ取消シタル者ト看做シ受取ルヘキ者ハ受取ルヘキ權利ヲ失ヒ引渡スヘキ者ハ引渡スヘキ義務ヲ免レ候事ト相定メ候ニ付若シ出訴致シ候トモ取上不致候條此旨布告候事

出訴期限規則

第一條

- 一 學藝ノ授業料
- 一 旅籠料
- 一 運送賃
- 一 飲食料
- 一 手附金

出訴



- 一 商人互ノ賣掛金
  - 一 職人ノ手間代金
  - 一 日雇人ノ給料
  - 一 請負金
  - 一 芝居等ノ木戸錢又ハ棧敷錢等
  - 一 男女藝者ノ揚代金
- 右ハ六ヶ月限

第二條

- 一 醫師ノ脈診及ヒ藥料
  - 一 授業師ヨリ門弟ニ給與シタル飲食料
  - 一 商人ヨリ商人ニ非サル者ヘノ賣掛代金
  - 一 一ヶ年期マテノ奉公人給料
- 右ハ一ヶ年限

第三條

- 一 期限ヲ定メタル貸附米金及ヒ利息アレハ其利息
  - 一 期限ヲ定メタル預米金及ヒ利息アレハ其利息
  - 一 家屋及ヒ土地ノ借賃
  - 一 小作米金
  - 一 證據金
  - 一 敷金
  - 一 物品ノ借賃又ハ損料
  - 一 養育料
  - 一 七ヶ年期マテノ奉公人給料
  - 一 期限ナキ年金及ヒ一生涯ノ年金
- 右ハ五ヶ年期

第四條

出訴







○第三項 裁判執行ニ付訴期限

明治十一年三月十一日司法省丁第九號大審院諸裁判所

達

裁判執行ノ出訴期限ニ付高知裁判所ヨリ甲號ノ通伺出ニ因リ乙號ノ通太政官へ伺候處伺ノ通ト御裁令有之ニ付丙號ノ通及指令候條爲心得相違候事

甲號 高知裁判所長判事石井忠恭伺 (十一年一月十二日)

明治八年四月二十五日滋賀縣伺ノ御指令ヲ玩味スルニ主タル訴件ニ附帶シ訴訟入費曲者ヨリ直者へ償却可致旨裁判言渡ノ後直者ヨリ滿六ヶ月ヲ經過シテ其償却ヲ請求スル片ハ出訴期限第一條ニ據リ直者ニ於テハ要償權利ヲ失シ曲者ニ於テハ期滿得免ノ權ヲ得ルニ至ル然ルニ主タル訴件ニ限リ權利者ニ於テ桂苴數年ノ久ヲ經過スルモ裁判執行ヲ請求スルヲ得ルハ允當ナラサル様被相考等シク是レ直者ノ曲者ニ於ケル如ク本按ニ關スル賣掛代金貸金等ノ訴件モ初審又ハ終審裁判言渡當日ヨリ起算シ夫々訴件ノ種類ニ應シ出訴期限ノ的條ヲ經過シテ權利者ヨリ裁判執行ヲ請求スル片ハ權利者ニ於テハ裁判權利ヲ拋棄シ義務者ニ於テハ其義務ヲ免レタルモノト見做シ裁判執行ノ請求狀及却下可然哉至急御指令ヲ仰キ候也

乙號 太政官へ上申 (十一年二月八日)

別紙高知裁判所伺ノ趣ヲ審思スルニ裁判言渡ノ後更ニ執行ヲ請求セス桂苴歲月ヲ經過スル者ハ固ヨリ期滿得免ノ効ヲ得ヘシ何トナレハ裁判言渡ニ因リ裁判ヲ執行スルノ權義ヲ生セシムルヲ以テ其權義ニ付必ス期滿得免ノ効アラサルヘカラサレハナリ抑斯ノ期滿得免ハ訴訟原案ノ種類ニヨリ期滿得免ノ長短ニ拘ハラサルヘシ蓋シ裁判言渡ナル者ハ雙方ノ間ニ更ニ裁判上ノ契約ヲ生セシムルノ理アルヲ以テナリ我國現行ノ出訴期限 六年第三百六十二號布告 ヲ視ルニ裁判執行ノ出訴期限ニ於テハ明文アルヲナシ而シテ其最モ長キ者五年ナリトス因テハ該伺ノ如キ訴訟原案ノ種類ニ拘ハララス滿五年ヲ以テ期限トナスコト允當ト思考スルニ因リ左之通指令可及ト存候得共明文ナキヲ以テ此段申稟候也

丙號 指令

伺ノ趣裁判執行ノ出訴期限ハ出訴期限規則第三條ニ準據シ五ヶ年タル可シ

○第二節 華士族卒等貸借裁判期限 明治五年十月七日第三百號布告

六年第三百六十二號布告  
一 華士族卒へ掛リ候金穀貸借ハ明治二年己六月郡縣ノ制被仰出候以前ノ分ハ裁判ニ不及候事

出訴



以テ出  
訴期限  
規則ヲ  
定ムル  
本節第  
一節ニ  
掲ク

一 靜岡及ヒ仙臺會律其外再立ノ藩々再立以前ノ金穀貸借ハ裁判ニ不及候事

一 自今貴賤上下一般ノ人民互ニ期ヲ約シテ金銀貸借シ如シ期ニ及テ不返時内證屢催促ヲナスト雖モ期月後滿五年ニ至ル迄一度モ訴出サル者ハ裁判ニ不及候事

但當七月以前ノ貸借ノ分ハ此限ニアラス

一 從前今後共家祿ヲ引當ニ致シ候金銀貸借ノ儀ハ一切裁判ニ不及候事

○第四項 華士族卒へ掛ル貸借裁判取捨ニ付心得方

治明

五年十一月二十七日  
司法省第四十一號布達

太政官第三百號ノ御布告ニ基キ左之通可心得此旨及布達候事

第一條 華士族卒へ掛ル金穀貸借ハ明治二年己巳六月二十五日以前ノ分ハ不取上  
翌二十六日以後ノ分ハ取上裁判スヘキ事

但華士族卒ヨリ平民へ係ルモ本條之通タルヘシ

十年第  
十二號  
布告ヲ  
以テ預  
ケ金穀  
裁判期  
限ヲ定  
ム

第二條 預リ金穀ハ證文面預ケ金穀ノ名目ニテ和足有之亦ハ預リ人へ融通セシム

ル廉ナシテ禮金等ヲ請ケル分ハ第一條ノ通心得ヘク尤モ全ク預ケ金ニテ和足禮金ヲ請ケサル分ハ及裁判若シ其金穀ヲ費用シ濟方不埒明時ハ斷獄課へ可引渡事

第三條 元士族卒當時歸農商ノ分及ヒ己巳六月ノ改革ニ付三代以下ニテ平民トナル者己巳六月二十五日以前ノ證文ニテ其節士族卒ナレハ取上ヘカラサル事

第四條 神職僧侶等ニ關スル分ハ貸借ノ節准士族卒ナレハ士族ヲ以テ可取扱事

第五條 明治貳年己巳六月二十五日以前ノ金穀貸借ヲ新規證文ニ書改タル分ハ不取上事

第六條 己巳六月二十五日以前ノ貸借ニテ華士族卒へ掛ル分ハ御布告前審判亦ハ對談日延中ト雖モ濟方不及裁判旨可申渡事

第七條 御布告前身代限申渡濟之分ハ申渡ノ通可及處分事

第八條 從前出訴吟味中和解シ家祿ヲ引當トナシ新規證文ニ改メ濟口聞届タルハ御布告ニ依リ不及裁判事

第九條 從前華士族ノ名目ヲ用ヒタル貸附金ハ第三百號ノ御布令ニ依リ取上ヘカ  
出訴



ラス候事

第十條 動産不動産ヲ債主ニ質入シタル者ハ取上裁判可致事

附リ沽券狀ヲ債主ニ渡シ金穀ヲ借用セシ者モ本條ニ准シ質入ト見做スヘキ事

○第五項 明治五年以前一般ノ貸借裁判期限心得方 明治

六年三月三十一日司  
法省第五拾號布達

壬申第三號御布告第三條但書ノ儀ハ左之通可心得事

一 壬申七月以前ノ金穀貸借ニテ既ニ同七月以前返濟期限過去タルハ同七月ヨリ五  
ケ年ノ内訴出サル者ハ不及裁判事

一 壬申七月以前ノ貸借ニテ返濟期限同七月後ニ係リタルハ期限後滿五年ニ至ル迄  
一度モ訴出サル者ハ不及裁判事

○第三節 慶應三年以前相互ノ貸借裁判ニ不及事 明治五年  
十月二十

二日第三百  
十七號布告

平民相互ノ金穀貸借慶應三年丁卯十二月晦日以前ニ係ル者ハ一  
般裁判ニ不及明治元年戊辰正月元日以後ノ分ハ裁判ニ及候事

○第四節 慶應三年以前動産不動産ヲ質取分裁判方 明治六  
年一月

十三日第  
九號布告

昨壬申歲第三百拾七號平民相互金穀貸借慶應三年丁卯十二月晦  
日以後ニ係ル者一切不及裁判旨及布告候處動産(金銀衣服家什  
等ノ搬運スヘキ者ヲ云フ)不動産(土地家屋等ノ搬運スヘカラサ  
ル物ヲ云フ)ヲ質物ニ取候分ハ右期日以前ニ係ルト雖モ取上及  
裁判候條此旨相達候事

○第五節 無年期ノ貸附金穀裁判期限 明治六年一月十  
三日第十號布告

金穀貸附證文ノ内返濟期限無之歟又ハ出來次第返却可致等ノ證  
書取置後日訴出ツルニ於テハ裁判申渡ヨリ十二ケ月ノ内濟方可  
申付事

但從前今後共無年期貸附中内證屢返濟ヲ促スト雖モ滿五年ニ  
至ル迄一度モ不訴出者ハ裁判ニ不及候尤モ土地家屋等ノ貸借

出訴



不動産ニ属スル儀ニ付滿五年ヲ過ルト雖モ可及裁判事

○第六節 民事訴訟用印紙規則

明治十七年二月二十三日第五號布告

○沿革略記

明治八年十二月第九十六號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則ヲ制定ス○同十七年二月第五號布告ヲ以テ前令ヲ廢シ民事訴訟用印紙規則ヲ制定頒布ス則チ現行法是ナリ

民事訴訟用印紙規則別紙之通制定シ明治十七年四月一日ヨリ施行ス

但明治八年<sup>十二月</sup>第九十六號布告訴訟用印紙規則ハ右施行ノ日ヨリ廢止ス

右奉 勅旨布告候事

【別紙】民事訴訟用印紙規則

第一條 凡ソ民事訴訟ノ書類ニハ此規則ニ從ヒ印紙ヲ貼用スルモノトス

第二條 訴狀ニハ正本一通ニ付請求ノ金額若クハ價額ニ應シ左

ノ區別ニ隨ヒ其受付ノ時ニ於テ印紙ヲ貼用ス可シ

金額	五圓マテ	貳拾錢	同拾圓マテ	三拾錢
價額	五圓マテ	貳拾錢	同拾圓マテ	三拾錢
同貳拾圓マテ	六拾錢	同五拾圓マテ	壹圓五拾錢	
同七拾五圓マテ	貳圓貳拾錢	同百圓マテ	三圓	
同貳百五拾圓マテ	六圓五拾錢	同五百圓マテ	拾圓	
同七百五拾圓マテ	拾三圓	同千圓マテ	拾五圓	
同貳千五百圓マテ	貳拾圓	同五千圓マテ	貳拾五圓	
同五千圓以上ハ千圓マテ毎ニ貳圓ヲ加フ				

控訴ニ於テハ右半額上告ニ於テハ全額ノ印紙ヲ加貼ス可シ

第三條 人事其他金額ニ見積ル可ラサルモノハ三圓ノ印紙ヲ貼用ス可シ其控訴上告ニ於テ加貼スルハ前條ニ同シ

但人事ニ於テハ極貧ノ者ニシテ戶長ノ證書ヲ所持スル者ハ裁判官ニ於テ印紙ノ貼用ヲ免スルコトアル可シ

出訴



第四條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付貳拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

答辯書證據物寫辯駁書辯論書上申書陳述書等

證人鑑定人評價人引合人等ノ呼出ヲ請求スル願書

審判ノ延期ヲ請求スル願書

第五條 左ノ書類ニハ正本壹通ニ付五拾錢ノ印紙ヲ貼用ス可シ

官吏ノ臨檢ヲ請求スル願書

財産差押又ハ物品公賣ヲ請求スル願書

執行命令書ヲ請求スル願書

身代限ノ處分ヲ請求スル願書

第六條 裁判言渡書ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄

本壹枚五錢其他ノ謄本ヲ下付スル時差出ス受取書ニハ其謄本

一枚三錢ノ割合ヲ以テ印紙ヲ貼用ス可シ

但裁判言渡書ノ謄本ハ壹枚十二行一行十二字詰其他ノ謄本

ハ壹枚二十行一行十八字詰トス

第七條 勸解ニ於テハ一件毎ニ勸解表ニ署名ノ時貳拾錢ノ印紙  
ヲ貼用ス可シ

第八條 此規則ニ依リ貼用シタル印紙ノ代價ハ曲者ヨリ直者ニ  
辨償ス可キモノトス

第十七年二月第四號  
布達ヲ以テ  
印紙種類  
種類定價  
定ムル本  
第六項ニ  
掲ケル

第九條 印紙ノ種類定價及ヒ貼用方ハ布達ヲ以テ之ヲ定ム

第十條 印紙ハ管轄廳ノ許可ヲ得タル賣捌所ニ於テ發賣セシム

其他ニ於テ賣買スルコトヲ得ス

第十一條 官許賣捌所外ニ於テ印紙ヲ販賣シタル者ハ二十圓以  
上二百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現在ノ印紙ヲ沒收ス其情ヲ知  
テ之ヲ買取シタル者ハ十圓以上百圓以下ノ罰金ニ處シ仍ホ現  
在ノ印紙ヲ沒收ス

第十二條 前條ノ規則ヲ犯シタル者ニハ刑法ノ不論罪及ヒ減輕

出訴



再犯加重數罪俱發ノ例ヲ用ヒス

●廣島縣伺電 (十七年五月一日)

米穀ニ係ル訴狀ニハ證券印稅規則ニ從テ價額ヲ見積リ印紙貼用スヘキヤ將テ訴狀當時ノ實價ニ依ルヤ

○司法省指令電 (十七年五月八日)

米穀ニ係ル訴狀ニ訴訟用印紙貼用方ノ伺ハ後段見込ノ通り但賣買ニ係ル訴訟ノ如キハ賣買代價ニ依リ印紙ヲ貼用ス可キモノトス

●靜岡縣伺 (十七年五月六日)

諸訴訟濟口證文及財産又ハ物品公賣或ハ身代限取消願書等御規則中明文無之ニ付印紙貼用ノ限ニ無之哉若貼用ナキモノトセハ何レノ印紙相用可然哉

○司法省指令 (十七年五月二十日)  
伺之越身代限又ハ財産差押又ハ物品公賣ヲ取消ス可キ願書及ヒ濟口證文ハ前段見込ノ通

○第六項 民事訴訟用印紙種類定價及貼用方

日第四  
號布達

明治十七年  
二月二十二

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用印紙規則制定候ニ付印紙ノ種類定價及ヒ貼用方左ノ通之ヲ定ム

淡黑色印紙	壹枚三錢	黑色印紙	壹枚五錢
赭色印紙	同拾錢	茶褐色印紙	同五拾錢
黃色印紙	同壹圓	青色印紙	同五圓
橙黃色印紙	同拾圓	綠色印紙	同拾五圓
嬌栗色印紙	同貳拾圓		

印紙ハ訴訟其他書類ノ正本ニ貼用シ貼用者ノ印章ヲ以テ消印ス可シ  
右布達候事

○第七節 訴答文例

明治六年七月十七日  
第二百四十七號布告

六年第三  
三百三  
十九號  
布告ヲ  
以テ訴  
答文例  
ハ當分  
御國人  
ノミ遵  
今般訴答文例並附錄別冊ノ通被相定候ニ付來ル九月一日ヨリ原  
被告人共訴答文式都テ此例ニ照準可致此旨相達候事

別冊 訴答文例

第一卷 原告人ノ訴狀

出訴



第一章 原告人ヨリ被告人住所身分ノ書付ヲ取ル事

第一條 訴訟ヲ爲サントスル原告人ハ其管轄ノ村役場ノ添翰ヲ以テ被告人ノ現住管轄ノ村役場ニ至リ被告人ノ身分ノ書付ヲ取タル後訴狀ヲ作ル可シ若シ住所氏名身分明瞭ナラハ其書付ヲ取ルニ及ハス

住所トハ某<sup>府</sup>管下某國某郡某<sup>村</sup>住居又ハ寄留ト記スノ類身分トハ官名役名華族士族神職僧尼百姓何職何商賣何渡世ト記スノ類

若シ一月ノ本主ニ非スシテ子弟又ハ厄介ノ類ハ某ノ子弟又ハ某厄介ト記ス可シ

第二條 原告人被告人ト管轄ヲ異ニシ道路隔絶ナラハ原告人我管轄ノ村役場ニ願ヒ役場ノ文通ヲ以テ被告人ノ氏名住所身分ノ書付ヲ取ルモ亦妨ケ無シトス但シ役場文通ノ入費ハ原告人

ヨリ償フ可シ

但此章原告外國人ナル時ハ本人名前本國職分及寄留ノ處ヲ訴狀中ニ記載シ次ニ被告ノ名前職分住所等委細記載ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事

〔七年第七十五號布告ヲ以テ代用人用ヒ方改定〕

第三條

第四條

第五條

第三章 訴狀ノ定則ノ事

第六條 訴狀ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 訴狀ハ簡明確實ニシテ證據ト爲ス可キ事件ヲ掲ケ文節冗長ナラサルヲニ注意シ自己ノ想像ヲ以テ踪跡ナキ事件ヲ述フルヲ得ス

第二 一切ノ訴狀ハ首ニ原被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩

出訴



書ニシ其末ニ年月日ヲ記シ原告人ト代書人トノ氏名連印ス  
ヘシ附錄第一號ヲ  
見合可スシ

但外國人ノ爲ニハ第一章但シ書ヲ見ル可シ

第三 訴狀ノ末ニ署スル氏名ハ其本人自署ス可シ若シ自署ス  
ルヲ能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第四 訴狀ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具  
ス可シ

但シ外國人ノ訴狀ハ銘々英佛語ヲ以テ認ルヲ得ヘシ其  
日本翻譯ハ裁判所ニ於テ正副二通ヲ認メ其手数料ヲ取立  
ツヘシ

第五 被告人ノ住所呼出ヲ受ク可キ裁判所ノ八里ノ距離外ニ  
在ル時ハ其里數ヲ被告人ノ氏名ノ左側ニ記載ス可シ若シ八  
里以内ナル時ハ其里數ヲ記載スルニ及ハス

十七年三月  
法省甲  
第一號  
告示ヲ  
以テ訴  
訟用紙  
ハ美濃  
又ハ同  
尺ノ紙  
ナ用ヒ  
壹枚  
拾四行  
貳拾字  
詰ト定  
ム一本

第四章 訴狀ノ書式ノ事

第九  
項ニ掲  
ク

第七條 貸附米金等淹滞ノ訴狀

貸附米金等淹滞ノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ米金元利ノ計算ト貸  
渡シタル年月日トヲ標記シ次ニ證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ期ヲ  
過キテ返濟セサル事情ヲ書ス可シ附錄第貳號ヲ  
見合ス可シ

田島サ貸渡シタル小作米金又ハ物品ノ損料金又ハ諸種ノ立替  
金又ハ召抱人等ノ引負金又ハ職人等ノ前貸米金又ハ貸地貸家  
等ヲ受取ラントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

但以下十九條迄原告外國人ナル時ハ其訴訟ノ趣意并願意ヲ  
簡明ニ記載ス可シ

但附錄第十八號ヲ見合ス可シ

第八條 預ケ米金淹滞ノ訴狀

預ケ米金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ米金ノ員數ト預ケタル

出訴



年月日トテ標記シ次ニ其記書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約シテ返濟セサル事情ヲ書ス可シ

借地等ノ敷金又ハ妻及ヒ養子女等ノ持參金又ハ實家若クハ親族等ノ仕送り金ヲ受取ントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第九條 賣掛代金淹滞ノ訴狀

賣掛代金淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ金高ヲ標記シ次ニ其帳面總計ノ高ヲ出シ之ニ被告入ノ證印アルヲ記入シ次ニ違約淹滞シタル事情ヲ書ス可シ 附錄第三號ヲ見合可ス

賣掛代金又ハ旅籠代金賄代金等通帳附込帳等ニ被告入ノ證印ナキ時ハ原告入ノ證據ト爲ストテ得ス

第十條 手附金賣買違約ノ訴狀

諸物品ヲ買ヒ手附金ヲ渡シ約定期限内ニ殘金ヲ渡サントスル時ニ至リ被告入違約シテ諸物品ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名

ノ次ニ買付タル物品ノ總高次ニ手附金ヲ渡シタル年月日及ヒ殘金ヲ渡シ物品ヲ受取可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ 附錄第四號ヲ見合可ス

諸物品ヲ賣リ手附金ヲ受取リ約定期限ニ至リ殘金ヲ受取ル可キ時ニ被告入違約シテ殘金ヲ渡サ、ルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ手附金ヲ受取リタル年月日及ヒ殘金ヲ受取リ物品ヲ渡ス可キ約定期限ノ年月日ヲ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ 附錄第五號ヲ見合可ス

第十一條 受負料淹滞ノ訴狀

諸職業受負淹滞ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ受負ヒタル年月日ト受負ノ金高ト既ニ受取リタル金數ト未タ受取ラサル金數トテ標記シ次ニ約定書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

第十二條 奉公人違約ノ訴狀

出訴



奉公人ニ年期ヲ約シ前金ヲ渡シ其年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取返サントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ抱入シタル年月日ト約定ノ年期ト前渡シノ金數トヲ標記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ違約ノ事情ヲ書ス可シ

職業傳習ノ弟子職業練熟ノ後ハ禮奉公ノ年期ヲ約シ年期未滿内ニ其家ヲ出テ還ラサル者ヲ取戻サントスルノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

奉公人又ハ弟子奉公ノ者等其主人師匠ヨリ受取ル可キ給米金淹滞ノ訴狀モ亦本條ニ照ス可シ

第十三條 專賣免許ヲ犯シタルノ訴狀

專賣ノ免許ヲ得タル者ヨリ他ノ摸倣密賣スル者ヲ差留メントスルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ專賣免許ヲ得タル年月日ト免許ヲ受タル役所ノ名ト專賣免許ノ年限トヲ標記シ次ニ免許ノ證

印又ハ證書ヲ寫載シ次ニ其密賣ノ事情ヲ書ス可シ

諸商工專賣ノ免許ヲシテ株式ト稱スル者ハ自己ニ妨アルヲ以テ他人ノ商業ヲ差留ル事ヲ訴ルヲ得ス

第十四條 商社中取引ノ訴狀

商社中甲ノ商人ヨリ乙ノ商人ニ對シ各種ノ取引ノ米金又ハ物品ノ類ニテ乘合商賣ト稱スル者モ證書確實ナル者ハ之ヲ訴ルヲ得可シ其訴狀ハ取引ノ摸樣ニ付キ各種ノ本條ニ照ス可シ先ニ開キシ商社ニ後ニ開カントスル商社ノ妨クルヲアルヲ以テ之ヲ訴ルヲ得ス但シ專賣免許ヲ犯スヲ得サルノ法ト相抵觸スルヲナカル可シ

第十五條 夫妻離別ノ訴狀

夫妻離別ノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ夫妻ノ氏名生年及ヒ婚姻ノ年月日ヲ標記シ次ニ其戸長役場へ届置キタル戸籍入別ヲ寫載

出訴



シ次ニ離婚ヲ爲ス可キ理由ヲ書ス可シ

原告人夫ナレハ其父母若シ父母在ラサレハ祖父母祖父母在ラサレハ尊族ノ親尊族ノ親在ラサレハ同等ノ親同等ノ親在ラサレハ卑族ノ親卑族ノ親在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ附録第六號ヲ見合ス可シ

原告人妻ナルモ前條ニ照シテ其父母親族等ヨリ訴テ可シ若シ

事危急ニ出テ親族等ニ告ルニ暇ナキ時ハ自ラ訴テ事ヲ得可シ

第十六條 養子女ヲ離別スル訴狀

養子女ヲ離別スルノ訴狀モ住所氏名ノ次ニ養父母及ヒ養子女ノ生年ト其養子女トナシタル年月日ヲ標記シ次ニ原被雙方ノ戸籍人別ヲ寫載シ次ニ離別ス可キ理由ヲ書シ原告人親族在ラサレハ近隣又ハ朋友ノ内二人以上ノ奥書連印ヲ爲ス可シ  
本生父母ヨリ養子女ヲ取戻サントスルノ訴狀モ本條ニ照ス可シ

シ若シ本生父母在ラサレハ其親族ヨリ訴ルコトヲ得ハシ  
養子女ヨリ養父母ヲ相手取リテ自ラ離別ヲ請フノ訴ヲ爲ス可シ  
ヲ得ス

第十七條 家督相續ノ訴狀

家督相續ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ亡父母ハ死亡ノ年月日生父母ハ其生年ト原被告人生年トヲ標記シ次ニ其原被雙方ノ戸籍人別ト讓狀遺狀等ノ證書アレハ其全文ヲ寫載シ次ニ自己相續ス可キ條理ト被告人相續ス可キ條理ヲキコトヲ書ス可シ附録第六號ヲ見合ス可シ

第十八條 田島山林等賣買違約ノ訴狀

田島山林屋敷建家等ヲ買ヒ之ヲ受取ラントスルノ訴狀及ヒ貸地貸家ヲ取戻サントスルノ訴狀モ第十條ノ第一項ニ照ス可シ  
田畑山林屋敷建家等ヲ賣リ之ヲ引渡シテ其代價受取ントスル

出訴



ノ訴狀モ第十條ノ第二項ニ照ス可シ

第十九條 經界ヲ爭フノ訴狀

國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ爭フ訴狀モ住所氏名ノ次ニ其舊記繪圖ノ枚數ヲ標記シ次ニ被告人ノ非理ヲ書ス可シ  
舊記繪圖ノ寫ハ別冊ト爲シ目錄ヲ附シ各番號ヲ朱記ス可シ  
繪圖ハ色ヲ以テ區別シ原告ノ區域ハ淺紅色ヲ用ヒ被告ノ區域ハ黃色ヲ用ヒ爭フ所ノ區域ハ着色ヲ用ヒス其他ノ經界ハ別色ヲ用ユ可シ附錄第七號ヲ見合ヌ可シ

但第七條但書ヲ見ル可シ

第二十條 控告ノ訴狀

原被告人預審又ハ終審ノ裁判言渡ヲ受ケ其裁決ニ服セスシテ之ヲ上等ノ裁判所ニ控告セントスルノ訴狀ハ住所氏名ノ次ニ訴訟ノ題目ト其年月日ト裁判所ニ呼出サレタル度數其年月日

十年第九號  
布告第九號  
訴上第九號  
手續第九號  
第五條  
參看  
本章第

十三節  
ニ掲ク

ト訟庭ニ臨ミタル裁判役ノ氏名ヲ知ルヲ得可キニ於テハ之ヲ記載シ次ニ其裁判言渡書ノ寫ト裁決ニ服セサルノ旨趣トヲ書シ且ツ前訴狀ノ寫ヲ別冊ト爲シ訴出可シ但シ控告人ノ住所ト控告ヲ爲ス裁判所トノ距離八里毎ニ一日ノ猶豫ヲ得ルノ外裁決ノ言渡ヲ受タル日ヨリ三ヶ月ノ期限ヲ過ル時ハ控告ヲ爲スコトヲ得ス

預審又ハ終審ノ裁判以前ノ場合ニ於テ其裁判役ノ曲庇壓制等アルヲ以テ原被告人之ヲ上等ノ裁判所ニ申告スル者モ亦本條ニ照ス可シ

第五章 一冊ノ訴狀ハ一事件ニ止ル可キ事

第二十一條 原被告人共人員多少ニ拘ラス訴狀ハ一事ヲ一冊ニ書スルニ限ル可シ又原告人一名ニシテ同時ニ數件ヲ訴フルモ訴狀ヲ各冊ニ作ル可シ

出訴







シタル者ニ非レハ其子孫ニシテ貸附證文ヲ所持スト雖モ父母  
祖父母等ノ讓渡シタル證書ナキ時ハ之ヲ訴フルコト得ス  
但外國人ハ其本人ノ國法ニ隨ヒ正シキ權ヲ得可シ

第十章 代官人ノ事〔九年第十八號布告ヲ以テ代官人ノ條ヲ廢止ス〕

第三十條

第三十一條

第三十二條

第二卷 被告人ノ答書

第一章 答書ノ定則ノ事

第三十三條 答書ヲ作ルニハ左ノ定則ニ循フ可シ

第一 被告人裁判所ノ呼出狀ト共ニ原告人ノ訴狀ヲ受取ル時  
原告人ノ陳述スル所條理アラハ速ニ熟議シ原告人之ヲ許諾  
セハ解訟ヲ請フ事ヲ得ヘシ其場合ニ於テハ代書人ヲシテ熟

議解訟ノ答書ヲ作ラシメ之ヲ裁判所ニ呈ス可シ第四十七條及第四十八條ヲ見合ス

第二 原告人ノ述ル所非理不實ニシテ辨解ス可キ確證アラハ  
其書類ノ全文ヲ寫載シ次ニ非理不實ノ事ヲ書ス可シ

第三 答書ノ首ニ被告人ノ氏名ヲ記シ住所身分ヲ肩書ニシ答  
書ノ末ニ年月日ヲ記シ被告人ト代書人トノ氏名連印アル可  
シ附錄第十三號ヲ見合ス可シ

第四 答書ノ末ニ署スル氏名ハ其本人ノ自筆ヲ用ユ可シ若シ  
本人自署スルコト能ハサル時ハ其旨ヲ氏名ノ肩ニ記ス可シ

第五 答書ハ十六行ニシテ一行十五字詰ニ認メ正副二通ヲ具  
ス可シ

第二章 代書人ヲ用フル事〔七年第七十五號布告ヲ以テ代書人用ヒ方ヲ改定ス〕

第三十四條

十七年三月  
省甲第一號  
告示ヲ以テ  
訴紙用ハ美濃

出訴



又ハ同  
尺ノ紙

一枚ニ  
拾四行

詰ト定  
第二十六條

第二十七條

第九  
頂ニ掲

第三章

代官人ノ事  
〔九年第十八號布告ヲ以テ代官人ノ條ヲ廢止ス〕

第二十八條

負債主米金等ヲ返濟スルニ債主原ノ證書ヲ還付セ

サルヲ以テ二重ノ催促ヲナス訴訟ハ被告入其答書ニ返リ證文

返證文ハ債主ヨリ原ノ證書ヲ還付セスシテ其米金受取ノ證書ヲ交付スルヲ云フ

ヲ寫載シ次ニ原告人ニ重ノ催

第二十九條

原告人米金等ヲ受取リタルノミノ證書ニシテ貸付

ノ米金ヲ受取リタル確證ノ文字ナク又ハ他ノ憑據トス可キ證

跡ナキ時ハ其米金ヲ受取タルノミノ證書ヲ以テ返リ證文ト看

做スヲ得ス

第五章

原告人ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル答書ノ事

第四十條

借用ノ米金等ヲ返濟スヘキ期限ニ至リ負債主ヨリ債

主ニ熟議シテ返濟延期ノ約ヲ結ヒ其證書ニ押印ヲ爲シタル債

主ヨリ其約ヲ破リ本證文ニ據リ訴ヘタル答書ハ對談一札對談一札

トハ返濟延期ノ證書ヲ云フアルヲ記シ次ニ其證書ノ全文ヲ寫載シ次ニ原告

第四十一條

負債主ヨリ返濟延期ノ約ヲ破リタル事件ヨリ起リ

債主本證文ニ據リ訴出タル原由アル時ハ負債主ナル者己レヨ

リ約ヲ破リタル返濟延期ノ證書ヲ以テ原告人破約ノ證トナス

第六章

原告人證書ヲ偽造シタル答書ノ事

第四十二條

被告入ノ證書ヲ原告人偽造シタル答書ハ其偽造ヲ

證スル爲メニ管轄村ノ役場ニ届ケ置タル年月日ノ人別帳ノ寫

出訴



ヲ記載シ次ニ此人別帳ノ印ト證書ノ印ト相違シタル旨ヲ書ス可シ

第七章 經界ヲ争フ答書ノ事

第四十三條 國郡鄉村山川田宅等ノ分界ヲ争フ答書ノ方法ハ第十九條ヲ照ス可シ

第八章

既ニ訴ヘラレタル事件ニ未タ訴ヘサル事件ヲ接續スル事

第四十四條 負債主米金ヲ返濟ス可キ期限ヲ過キテ返濟セサルヲ訴ヘラレタルニ別ニ其債主ヨリ受取ル可キ米金アリテ其受取可キ期限モ亦タ過キ未タ訴ヘスト雖モ雙方均シク返濟ノ約期ヲ破リタルヲ以テ兩件ヲ接續シ差引ノ計算ヲ爲サントスル答書ハ負債主ヨリ其別ニ受取ル可キ米金ノ證書ヲ寫載シ次ニ差引計算ヲ爲スノ旨ヲ書ス可シ

第四十五條

負債主甲某債主乙某ヨリ借用シタル米金ヲ返濟スヘキ期限ヲ過キテ訴ヘラレタルニ答ルニ當リ甲某其借用シタル米金ハ更ニ丙某ニ貸附ケ其期限ヲ過キ返濟セサルヲ以テ既ニ訴ヘラレタル乙某ノ事件ト未タ訴ヘサル丙某ノ事件トヲ接續シテ丙某ノ返濟ヲ爲ス可キ米金ヲ以テ乙某ニ返濟セソフヲ答ルヲ許サス何トナレハ乙ノ貸ス所ノ者甲ニシテ丙ニ非ス丙ノ借ル所ノ者ハ甲ニシテ乙ニ非ラサルヲ以テナリ

第九章

對決前熟議解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十六條 被告人訴狀ニ對シ辨解スルヲ能ハサル者ハ速ニ原告人ト熟議シ對決前ニ解訟ヲ爲シタル答書ハ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十四號ヲ見合ス可シ

第四十七條

前條ノ場合ニテ貸借淹滞ノ訴ニ起ル解訟ノ答書ハ償ノ既濟又ハ未濟ト雖モ更ニ延期ノ約ヲ結ヒタル等ハ前條ニ

出訴



照ス可シ各種違約ノ訴訟ハ原被雙方ノ熟和ニ至リ又ハ更ニ改定ノ條約ヲ立テタル等モ亦前條ニ照ス可シ

第十章 對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第四十八條 原被告人對決審判前ニ被告人ヨリ負債ヲ返濟スルノ延期ヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至

リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期ノ旨趣ヲ書シテ原告人承諾ノ與書連印ヲ爲サシム可シ

第十五號ヲ見合ス可シ

第十一章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償ノ延期ヲ約シテ解訟ヲ爲シタル答書ノ事

第四十九條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ

被告人ノ負債ヲ延期代償セントヲ請ヒ原告人之ヲ承諾セハ熟議解訟ノ答書ニ其延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償人及ヒ原告人ノ

與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十六號ヲ見合ス可シ

第十二章 對決前親戚又ハ朋友ヨリ代償延期ノ約定ヲ爲シタル答書ノ事

第五十條 原被告人對決審判前ニ被告人ノ親戚又ハ朋友ヨリ被

告人ノ負債ヲ延期代償セントヲ請ヒ原告人之ヲ承諾シテ其審判ヲ仰カス延期ノ日ニ至リ完ク返濟スルノ後解訟ノ證書ヲ呈セントスル者ハ其答書ニ延期代償ノ旨趣ヲ書シ代償及ヒ原告人ノ與書連印ヲ爲サシム可シ附錄第十七號ヲ見合ス可シ

訴答文例附錄

第一號

訴狀表紙ノ式美濃紙大半紙又ハ右寸法ニ同シキ紙ヲ用ユ可シ

年月日

出訴



某訴狀

二百九十一

住所  
身分  
氏 名

某訴狀トハ假令ハ貸金ノ淹滞ヲ訴ルハ貸金催促ノ訴狀ト記  
シ流質地ノ争訟ハ流質地引渡催促ノ訴狀ト記スノ類  
訴狀ノ式

書式代印  
人連印  
ア第七  
年第五  
十月七  
布告ニ  
依リ除

某訴

住所  
身分  
原告人 氏 名

キ又六  
年第三  
百十二  
號布告  
ナ以テ  
宛書ス  
改正ス  
毎號皆  
同シ

被告人 氏 名  
標記云々

右原告人氏名申上候私儀云々

年月日 氏 名 印  
某

裁判所長

氏 名

第二號

貸金催促ノ訴狀

住所  
身分  
原告人 氏 名

出訴

二百九十一



貸金催促ノ訴

住所

身分

被告人 氏

名

一元金何圓

年月日貸附

一利金何圓

一年又ハ一月幾分ノ利

合何圓

右證文ノ寫左ノ如シ

借用證文

一金何圓

借主

右云々

氏

名

證人

第三號

賣掛代金淹滞ノ訴狀

出訴

住所

氏

名

貸主

名當

右原告人氏名申上候云々

住所

身分

年月日

氏

名印

某

裁判所長

氏名



原告人 氏 身分 名  
賣掛代金淹滞ノ訴

住所  
被告人 氏 身分 名

一金何圓

右賣掛帳ノ總計高ニ御坐候

但帳面ニ被告人ノ證印有之候

若賣掛帳ニ非スニテ證文ナレハ其證文

全文ノ寫ヲ出ス可シ

右原告人氏名申上候云々

年月日 氏 名 印

某

裁判所長

氏 名

第四號

買附米引渡違約ノ訴

住所

身分

原告人 氏 名

買附米引渡違約ノ訴

住所

身分

被告人 氏 名

出訴



一米何石 年月日買取約定此  
度受取ルヘキ石高

代金何圓 何石ニ付  
何圓換

内何圓 年月日手付金トシテ渡濟

殘何圓 年月日限現米引替ニ渡スヘキ約定

右約定證書ノ寫左ノ如シ

證書云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名印

某

裁判所長

氏名

第五號

賣附生絲代金引渡違約ノ訴狀

住所

身分

原告人 氏

名

賣附生絲代金引渡違約ノ訴

住所

身分

被告人 氏

名

一金何圓 年月日限生糸引替ニ  
テ受取ルヘキ錢金高

元金何圓 年月日生糸何斤  
賣附約定ノ金高

但何斤ニ付何圓替

内何圓 年月日手附金  
トシテ受取濟

右約定證ノ寫左ノ如シ

證書云々

出訴



右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名印

某

裁判所長

氏名

第六號

妻離別ノ訴狀

住所

身分

原告人

氏

名

妻離別ノ訴

住所

身分

被告人

氏

名

夫 氏名當何歳

妻 氏名當何歳

年月日娶ル

某御役所ニ差出置候年月日ノ戸籍人別帳

ノ寫左ノ如シ

人別帳云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名印

前書申上候處相違無御座候

住所

身分

年月日

原告人ノ祖  
父母父母等

氏

名印

出訴



某 氏 名 印

裁判所長

氏 名

第七號

經界ヲ爭フ繪圖ノ式

年月日ノ原圖何枚ノ内  
年月日寫之

住所

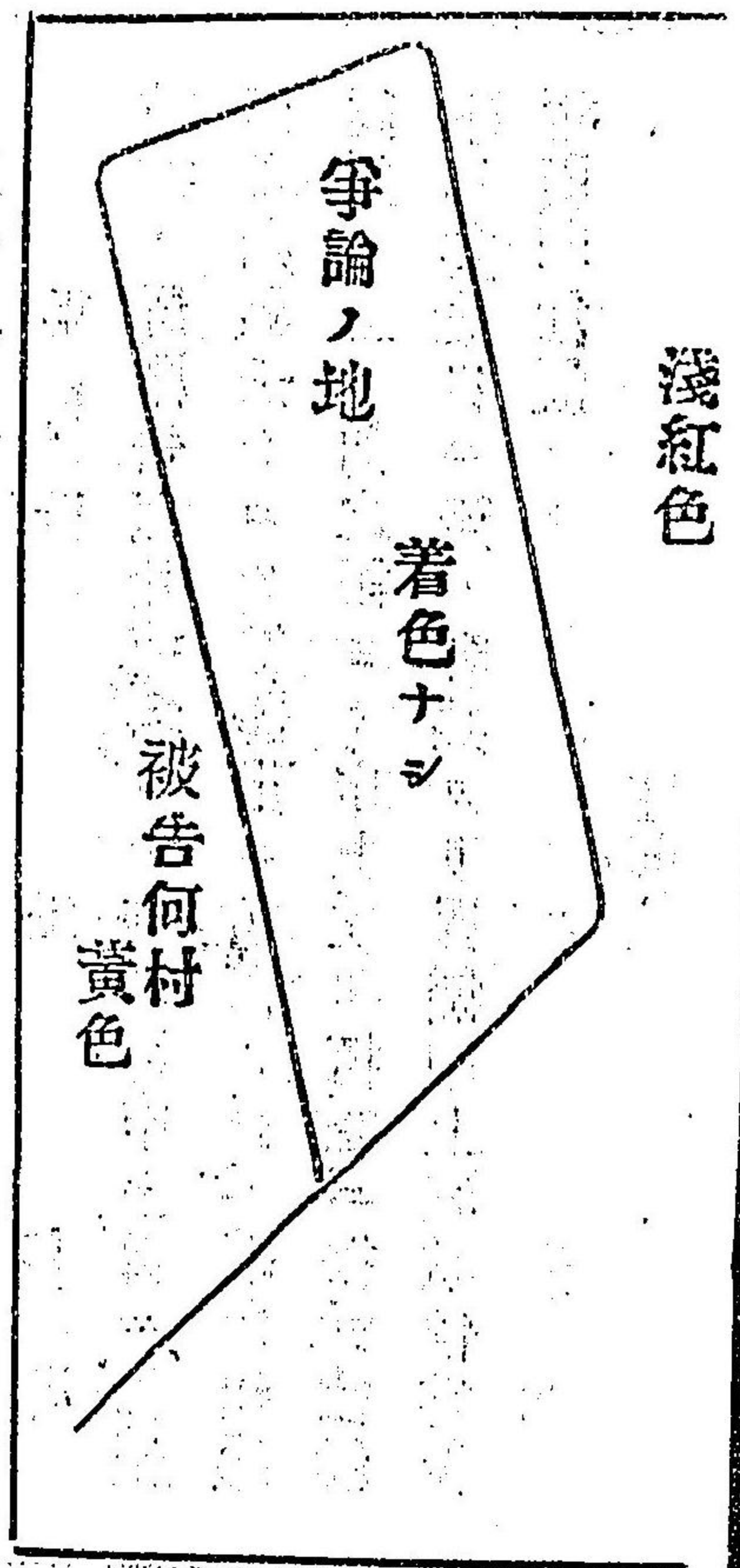
身分

原告何村

原告人 氏

名 印

淺紅色



第八號

原告三人以上ナルヲ一人ニ任スル訴狀

住所

身分

原告人 氏 名

出訴



某ノ訴

住所

身分

被告人

氏

名

標記云々

右原告人氏名申上候云々

年月日

氏

名印

前書ノ儀原告私共連名ニテ御願可申上等ニ御坐候處病氣云々ニテ難罷出ニ付何ノ誰へ總代相頼候然ル上ハ何之誰ヨリ申上候事柄並ニ御受仕候事柄共後日ニ至リ私共ヨリ異儀申上間敷候爲後證與印仕候

住所

第九號

年月日

身分

氏

名印

住所

身分

氏

名印

某

裁判所長

氏名

被告人連名中脱走又ハ病死人アルノ訴狀

住所

身分

出訴



原告人 氏 名  
某ノ訴

住所  
被告人 氏 名  
身分

元住所

被告人 氏 名  
身分

右何ノ誰ハ年月日脱走致シ候段  
何村役人何之誰ヨリ承知仕候  
住所

被告人 氏 名  
身分

右何ノ誰ハ年月日死亡致シ候段  
何村役人何之誰ヨリ承知仕候  
右原告人氏名申上候云々

年月日 氏 名 印  
某

裁判所長 氏 名

第十號

讓證文ヲ以テ催促スル訴狀〔九年第九十九號  
布告ニ依リ消滅〕

第十一號  
第十二號  
代理人ヲ頼ム訴狀〔上〕

一時假リノ代理人ヲ出ス證書〔上〕  
出訴



第十三號

答書表紙ノ式 用紙寸法第壹號  
訴狀ノ法ノ如シ

年月日

某ノ答書

住所

身分

氏

名

答書ノ式

住所

身分

被告人

氏

名

某ノ答

右住所身分何之誰何々之儀訴出候付今何日御呼  
出之御狀拜見仕御答申上候  
私儀云々

證據ノ書類アラハ其寫テ記載スヘシ

右之通御座候

年月日

氏

名印

某

裁判所長

氏名

第十四號

對決前熟議解訟ノ答書

出訴



住所

身分

被告人 氏

名

某ノ訴濟口ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼  
出ノ御狀拜見仕原告人へ熟談濟方仕候趣申上候  
私儀云々

年月日

氏

名 印

前書被告人何之誰ヨリ申上候通熟談濟方仕候付  
此上對決ノ御裁斷不奉願候

住所

身分

年月日 原告人 氏

名 印

某

裁判所長

氏 名

第十五號

對決前返濟延期ノ約定ヲ爲シタル答書

住所

身分

被告人 氏

名

某ノ訴濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼  
出ノ御狀拜見仕原告人へ熟談之上濟方日延約定  
仕候段左之通御座候

出訴



私儀云々

年月日

氏

名印

前書被告人何之誰申上候通熟談之上濟方日延約定仕候付來何年何月何日迄御裁斷御猶豫奉願候

住所

身分

年月日 原告人 氏

名印

某

裁判所長

氏名

第十六號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル解訟ノ答書

住所

身分

被告人 氏

名

某ノ訴何之誰ヨリ日延代償ニテ濟口之答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼

出之御狀拜見仕原告人へ熟談之上親族朋友中何之誰

ヨリ日延代償約定仕候段左之通御座候

私儀云々

年月日

氏

名印

住所

身分

代書人 氏

名印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ日延代償ノ

出訴



約定仕候段相違無御座候

住所

身分

年月日 代償人 氏

名 印

前書被告人何之誰申上候通私共承諾仕候付此上  
對決ノ御裁斷不奉願候

住所

身分

年月日 原告人 氏

名 印

某

裁判所長

氏 名

第十七號

對決前他人代償ノ延期ヲ約シタル答書

住所

身分

被告人 氏 名

某ノ訴何之誰代償濟口日延ノ答

右住所身分何之誰何々ノ儀訴出候付今何日御呼  
出之御狀拜見仕原告人へ熟談之上親族中何之誰

ヨリ代償濟方日延ノ約定仕候段左之通御座候  
私儀云々

年月日 氏 名 印

前書被告人何之誰申上候通私共ヨリ代償濟方日  
延ノ約定仕候段相違無御座候

住所

出訴



身分  
代償人 氏 名

前書被告人何之誰申上候通熟談之上何之誰ヨリ  
代償濟方日延ノ約定仕候付來何年何月何日迄御  
裁判御猶豫奉願候

住所

身分

年月日 原告人 氏

名 印

某

裁判所長

氏 名

第十八號

外國原告人訴狀ノ式

本國住所

身分

原告人 氏 名

訴狀

住所

身分

被告人 氏 名

右原告人氏名ヨリ右被告人氏名ニ對シ當御裁判  
所へ左之通訴訟申上候

第一云々

第二云々

第三云々

依之原告ヨリ御裁判所へ云々被成下度願上候事

但シ訴訟ノ根源事實ノ大畧ヲ明白ニ認  
ムヘシ若其事實混交シテ長文ナル時ハ  
第一第二第三條ト之ヲ區別スヘシ

出訴



但シ何等ノ處置ハ原告人ノ所願ニ候ヤ  
金子ノ拂カ其金高何程カ右判然ト認メ  
其他公正ノ御裁判ヲ願ノ趣ヲ認ムヘシ

日本地名

年月日

原告人 氏

名 花押

若シ原告人ノ代言者アル時ハ左ノ如ク  
加判スヘシ

代言者 氏

名 花押

某

裁判所長

氏 名

○第八節 訴答文例ハ御國人ノミ遵守

明治六年十月十日第  
三百三十九號布告

本年七月第貳百四拾七號布告訴答文例ハ詮議ノ次第モ有之當分  
御國人ノミ遵守候儀ト可相心得此旨布告候事

○第九節 訴答文例中代書人用ヒ方

明治七年七月五日  
第七拾五號布告

明治六年七月第二百四十七號布告訴答文例中原告人被告人訴狀  
答書ヲ作ルニ必ス代書人ヲ用フヘキ旨記載候處自今左ノ通改定  
候條此旨布告候事

一原告人被告人訴狀答書及ヒ雙方往復文書ヲ作ルニ代書人ヲ撰

ニ代書セシムル共又ハ代書人ヲ用ヒスシテ自書スル共總テ本  
人ノ情願ニ任スヘキ事

一原告人被告人ニテ代書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ  
以テ差添人トナシ訴狀答書等へ連印セシムヘキ事

但訴答文例中本文ト相抵觸スル廉々ハ總テ廢止ノ儀ト可相  
心得事

○第十節 訴訟手續ニ差支サル者ハ差添人ニ不及

明治八年  
二月九日

第十三  
號布告

明治七年七月第七十五號布告訴答文例中改定原告人被告人ニテ代

出訴



書人ヲ用ヒサル時ハ親戚又ハ朋友ノ者ヲ以テ差添人トナシ訴狀  
答書等へ連印セシムヘキ旨記載候處自今原告人被告人訴訟手續  
ニ差支サル者ハ差添人ニ不及候條此旨布告候事

○第七項 訴答文例中ノ證書ナキモ訴答見認方

明治十年三月二十

六日司法省丁第二十七號大審  
院上等裁判所地方裁判所へ達

訴答文例ハ唯リ訴答ノ書式ヲ指示シタルモノナレハ第十四條第二十八條第二十九  
條ヲ除クノ外文例中云々スル所ノ證書等ナシト雖モ證據ノ端緒之レアルニ於テハ  
憑據アル訴答ト見認ム可キハ勿論ノ事

○第八項 控訴者ヨリ訴狀數通爲差出方

明治十年十二月三  
日司法省丁第八拾

四號大審院諸  
裁判所へ達

控訴者訴狀數通差出方ノ儀長崎上等裁判所ヨリ甲號ノ通伺出候ニ付乙號ヲ以テ太  
政官へ上申シ御裁令ノ上丙號ノ通及指令候條此段爲心得相達候事

甲號 長崎上等裁判所長判事伊丹重賢伺 (十年九月十一日)

控訴者訴狀正副兩通ヲ差出ス成規ニ有之動モスレハ被告數名ニシテ該時住居各

所ニ相成遠ク數十里ヲ相隔候者間々有之右副書一冊ヲ以テ數人へ答辯等申付候  
テハ不都合不少是レカ爲メ自然事務遷延人民ノ難澁數ナカラス以來右様相手方  
數員ニシテ其内旅行又ハ隔地へ散在スル者アル時ハ上等裁判所ニ於テ直チニ原  
告人へ申談時宜ニ應シ數通差出サセ候テ可然哉此段上申仰御指揮候也

乙號 太政官へ上申 (十年十月二十九日)

長崎上等裁判所伺控訴人訴狀ノ儀正副二通トハ訴狀進呈ノ常式ニシテ該伺ニ謂  
ヘル如ク相手方數名或ハ旅行或ハ遠地隔絶ノ場合ニ於テ原告人へ申談シ適宜ニ  
數通差出サシムルハ差支無之儀ト思考候得共訴答文例第六條第四項ニ明文アル  
ヲ以テ一應相伺候間急速何分ノ御裁令被下度候也

丙號 指令 (十年十一月三十日)

伺之通

○第九項 民事訴訟書類紙種及行數字詰方

明治十七年三月  
五日司法省甲第

壹號  
告示

今般第五號布告ヲ以テ訴訟用野紙規則廢セラレ候ニ付テハ本年四月一日以後民事  
訴訟ニ關シ大審院又ハ裁判所へ差出ス書類ハ都テ美濃紙又ハ之レト同尺度ノ紙ヲ

出訴



布達テ以認入償則ム一第章揭  
テ入却チ一第章揭  
訴費規定本廿二  
テ入却チ一第章揭

用ヒ一枚貳拾四行一行貳拾字詰ニ書スヘキモノトス

但訴訟入費ハ明治九年當省甲第五號布達第一條第九條ニ定メタル割合ニ依リ  
書類認料ハ一枚貳拾錢翻譯料ハ一枚金四圓ト相成ル義ト心得ヘシ

右告示候事

●兵庫縣伺 (十七年二月二十九日)

官金拜借主他債ノ爲メ身代限ノ處分ヲ受クルトキ追訴之儀ニ付明治十五年二月  
四日太政官第拾貳號御達有之候處右第一項用紙ハ通常公文用紙ニナスト雖其  
書式ハ従前ノ通訴答文例ニ據リ可認儀ト被存候得共爲念此段相伺候也

○司法省指令 (電報) (十七年三月十日)

追訴書式ノ儀ニ付伺之趣ハ訴答文例ニ據ルヲ要セス

○第十一節 負債主失踪後ノ訴訟處分方

明治八年一月二十日第六號布告

民法裁判上負債者失踪後ノ訴訟ハ失踪後三十六ヶ月ノ時間ハ採  
上ケサル成例ニ有之候處本年三月一日ヨリ以後ハ左之通相改メ  
候條此旨布告候事

第一條 債主定約期限未滿内ニ負債者ノ失踪ヲ知ル時ハ定約滿  
期ニ至リ直ニ裁判所ヘ訴出ツ可キ事

第二條 債主未タ負債者ノ失踪ヲ知ラズ定約滿期又ハ出訴期限  
將ニ盡ントスルヲ以テ裁判所ヘ出訴シ裁判所ノ與書ヲ以テ負  
債者ニ掛合始テ其失踪ノ事ヲ知ル時ハ右與書訴狀ヲ再呈シ其  
旨届ケ出ツヘキ事

第三條 前條々ノ場合裁判所ニ於テハ一應訴狀採上ケ直ニ失踪  
者所管ノ戸長ヘ申付失踪ノ年月日ヲ訊明シタル上債主差出シ  
タル証書ニ負債者何年何月何日家出ノ未行衛相分ラサルニ付  
追テ本人見當ルカ又ハ三十六ヶ月ノ滿月後跡相續ヲ爲ス可キ  
者ニ掛リ此裏書証書ヲ以テ再訴致スヘキ旨ヲ記載シ訴狀下戻  
ス可キ事

六年第 第四百條 債主ニ於テ前條ノ裏書証書ヲ受取置キタル上ハ本人見

出訴







第六條 控訴ヲ爲ス者ハ其初審ヲ受ケタル始審裁判所ニ届ケ出ツヘシ但シ添翰ヲ乞フニ及ハス

第七條 前條ノ届ヲ受ケ取リタル始審裁判所ハ裁判言渡ノ執行ヲ停止スヘシ若シ控訴裁判所ノ請求アル時ハ始審裁判所ニ於テノ訴狀答書口書裁判見込等ヲ差出スヘシ

第八條 控訴裁判所ニ捧クルノ訴狀ハ訴答文例ニ照準スヘシ

第二章

上告總則ノ事

第九條 各裁判所ノ終審ヲ不法ナリトシ大審院ニ向テ取消ヲ求ムル者之上告ト云

第十條 上告スルコトヲ得ルノ事件ハ

- 第一 裁判所管理ノ權限ヲ越ユ
- 第二 聽斷ノ定規ニ乖ク

第三 裁判法律ニ違フ

第十一條 大審院ハ上告ヲ受クルノ所ニシテ控訴ヲ受クル所ノコアラス故ニ控訴スヘキノ事ヲ以テ誤テ上告スル者アルモ之ヲ斥ケテ理セス

第十二條 陸海軍ノ裁判權限ヲ越ユル者ハ之ヲ大審院ニ上告スルコトヲ得

第十三條 凡ソ上告シタル者已ニ大審院ノ判決ヲ經レハ更ニ訴フルコトヲ得ス

第三章

民事上告ノ事

第十四條 民事ノ上告スルコトヲ得ル者ハ已ニ控訴裁判所ニ控訴シ其審判ヲ經タル者ニ限ル

第十五條 上告ヲ爲ント欲スル者ハ裁判言渡ヨリ二月内ニ上告

出訴



狀ヲ大審院ニ捧クヘシ而シ同時被告人ニ通知スルヲ要ス若シ原裁判所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キ時ハ二月ノ外八里毎ニ一日ヲ増ス此定期ヲ過レハ上告スルヲ許サズ上告狀中ニハ必ス左ノ事實ヲ記載スヘシ

第一 原告人ノ住所身分氏名

第二 被告人アレハ其住所身分氏名

第三 被告人ノ住所身分氏名

第四 證人又ハ引合人アレハ其住所身分氏名

第五 始審裁判所ニ出訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

第六 控訴裁判所ニ控訴シ又ハ被告ニテ呼出サレタル年月日及ヒ裁判言渡ヲ受ケタル年月日

上告狀ハ正本一冊及ヒ副本五冊ヲ差出スヘシ

上告狀ニハ必ス左ノ書類ヲ添ヘ差出スヘシ

第一 始審裁判所ニ於テノ訴訟并ニ答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第二 控訴裁判所ニ於テノ訴狀並答書ノ寫及ヒ裁判言渡書ノ寫

第三 上告狀中ニ憑據トナス書類ノ寫ノ各書類ニ番號ヲ朱書シ編ノ一冊ト爲シ又ハ葉數多ニ付編ノ幾冊ト爲シタル者ノ右ノ訴狀又ハ答書及ヒ憑據書類ノ寫ヲ所持セサル者ハ原裁判所ニ出願シ裁判所ノ簿冊ヲ訟庭ニ取下ケ見座ノ目前ニ於テ之ヲ寫シ取ルヲ得ヘシ

若シ原裁判所ニ於テ書類寫取ノ出願ヲ許サ、ルニ因リ上告人其寫ヲ出シ能ハサル時ハ其旨ヲ上告狀中ニ記載スヘシ

第十六條 上告者ハ其上告狀ニ添テ金拾圓ヲ大審院ニ預クヘシ

出訴



若シ其金高ヲ預ケサルキハ上告ヲ爲スヲ得ス

第一 若シ上告ヲ取上ケサルキハ其預リ金ヲ没入ス

第二 若シ上告ヲ取上ケ原裁判ヲ破毀シタル時ハ預リ金ヲ還付ス

第三 若シ上告ヲ取上ケ被告人ト對審シタルノ後之ヲ斥ケ

テ原裁判ヲ破毀セサル時ハ預リ金ヲ没入シ又訴訟入費規

則ニ照シテ被告人ノ費用ヲ償ハシム 被告人トハ上告者ノ相手方ヲ云

九年司法省第五號布達ヲ以テ訴訟入費償却規則ヲ定ム 第十七條 上告ヲ爲ス者ハ先ツ原裁判所ニ届出ツヘシ原裁判所

「本章」ニ於テハ書類ヲ三日内ニ大審院ニ遞送スヘシ

「第廿一節」 第十八條 上告ニ付テハ裁判ノ執行ヲ停メス大審院已ニ原裁判

ヲ破毀スルニ至レハ即日原裁判所ニ通報シテ 大審院ヨリ郵信ヲ發ス 執行ヲ

止メ更ニ審判落着ノ日ニ至テ前ノ執行ヲ取消シテ後ノ裁判ヲ執行セシムヘシ

但内國人ヨリ裁判外ノ人民ニ對シ又ハ裁判外ノ人民ヨリ内

國人ニ對スル上告ハ原裁判ノ執行ヲ停ムヘシ

第十九條 上告狀ハ原告人自ラ之ヲ捧クルモ又ハ代理人ヲシテ

之ヲ捧ケシムルモ本人ノ意ニ任ス

第二十條 大審院ニ於テ判事審聽シ不當ナル上告ナリト決スル

時ハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ受理セサルノ旨ヲ言渡スヘシ

第二十一條 判事審聽シテ當然ノ上告ナリトシ之ヲ判決スヘキ

旨ヲ言渡シタル時ハ其後二日内ニ被告人呼出狀ヲ仕出ス可シ

此ノ呼出狀ニハ上告狀ノ副本ヲ添フヘシ

第二十二條 被告人ハ呼出狀ヲ受取リタルヨリ三十日内ニ答辯

書ヲ作リ自身又ハ代人ヨリ之ヲ大審院ニ捧クヘシ但被告人

ノ住所ヨリ大審院ニ至ルノ距離八里ヨリ遠キキハ八里毎ニ一

日ヲ増スヘシ

出訴



第二十三條 大審院ニ於テ被告人ノ答辯書ヲ受取リシキハ院長ヨリ判事ノ中ニ於テ一人ノ主任ヲ命シ一件書類ヲ取纏メ遲緩ナク一件始末書ヲ作ラシメ然ル後ニ原被對審ノ日ヲ豫定シ三日以前ニ原被對審ノ呼出狀ヲ原被雙方ニ送達スヘシ

第二十四條 原被對審ノ節ハ判事席ニ臨ミ最初ニ主任判事一件始末ヲ宣讀シ次ニ原告ノ陳述次ニ被告ノ陳述次ニ原被交互ノ論辯ヲ審聽シ而シテ後ニ原告人上告理アリト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ原裁判所ノ裁判ヲ破毀スルニ付更ニ某裁判所ニ於テ裁判ヲ受クヘキ旨又ハ大審院ニ於テ裁判スヘキ旨ヲ言渡スヘシ

第二十五條 若シ原告人ノ上告理ナシト決スルキハ何々ノ理由ヲ以テ上告ヲ斥クル旨ヲ言渡スヘシ

第四章

刑事上告ノ事〔刑事上告ハ治罪法ニ因リ消滅スルヲ以テ省署ス〕

○第十四項 外國人ニ係ル民事訴訟手續

明治八年五月八日司法省甲第三號布達

內國人ヨリ外國人ヘ係ル民事ノ訴訟手續左之通相定候條此旨布達候事〔九年司法省甲第三號布達ヲ以テ民事ノ下刑事ノ二字ヲ删除ス〕  
內國人原告ニテ外國人ニ係ル民事ノ訴訟ハ原告人其事由チ各開港開市場ノ府縣廳ニ申出其廳ノ添狀ヲ得テ被告人管轄ノ各國領事ヘ申訴スヘシ

○第十五項 外國人ニ係ル刑事及民事附帶訴訟方

明治九年九月

二日司法省甲  
第拾貳號布達

明治八年當省甲第三號ヲ以テ布達候內國人ヨリ外國人ニ係ル民事刑事ノ訴訟手續中今般左之通相定候條此旨布達候事

第一條 內國人原告ニテ外國人ニ係ル刑事并ニ民事附帶ノ訴訟ハ檢事其他ノ警察官〔東京ニテハ警視廳其  
他ノ府縣ハ地方官〕ニ於テ之ヲ承ケ直ニ被告人管轄ノ外國領事ヘ照會シ裁判ヲ求ムヘシ

第二條 前條ノ場合ニ於テ犯罪ノ爲メ損害ヲ受タル者其償ヲ求ル民事ノ訴ハ總テ本人ノ望ニ任スヘシ

出訴



○第十六項 民事裁判執行手續及ヒ執行命令書式

明治十八年七月

月二十八日內務省甲第二十六號  
警視廳府縣(東京府ヲ除ク)へ達

民事裁判執行ヲ遂ケサル者アルハ權利者ヨリ執行命令書ノ下付ヲ請求スル場合ニ於テハ裁判所ハ審ニ權利者ニ下付シタル裁判言渡書寫ノ末尾ニ左式ノ如キ命令書ヲ添付シ契印ヲ捺シ下付スヘキ旨ニ付權利者ニ於テ之ヲ提供シ義務者所轄ノ警察署ニ願出ルルハ警察官ニ於テ別ニ裁判所ノ照會ヲ須タス直ニ義務者ヲシテ該裁判ノ通執行セシメ候様可致此旨相達候事

執行命令書

當裁判所ハ誰某ヨリ誰某ニ對スル何々事件ニ付大審院(某控訴裁判所)(某始審裁判所)(當裁判所)ノ與ヘタル此裁判ノ執行ヲ命令スル者也

明治 年 月 日

某始審(治安)裁判所印

○第十七項 終決裁判執行不服說明訴却下ニ付上告處分

方 明治十一年十月十六日司法省下  
第三十六號各上等裁判所へ達

別紙終決裁判執行云々大審院ヨリ伺出候ニ付朱書之通指令ニ及候條此旨心得ノ爲メ相達候事

〔別紙〕

茲ニ某ノ地方裁判所ニ於テ終決裁判ノ執行ヲ爲サント其場ニ臨ミ判文ニ照ラシ原告被告ニ云々ノヲ命シタリ然ルニ一方ノ甲者其ノ執行ノ命令ハ判文ノ意ニ違ヘリトシ判文ヲ提供シテ判文通ノ執行ヲ求メシニ執行裁判官ハ之レニ說明ヲ與ヘス而シテ該地方警察官ヲシテ之レカ執行ヲサシメタリ依テ甲者ハ其執行ノ判文ニ違フ旨ヲ訴狀ニ作り以テ其裁判ヲ爲セシ原裁判所即チ某上等裁判所へ差出シ原判文ノ說明ト原判文ニ違ヒシ執行ノ救正トヲ願ヒシニ某上等裁判所ハ其說明ヲ與ヘスノ判文ニ違ヒシ執行ニ異論アラハ執行スヘキノ裁判所即チ初審廳へ申立同廳ノ指揮ヲ受ヘキ儀ト可相心得ト申渡シ右ノ訴狀却下シタリ爰ニ於テ甲者ハ右某上等裁判所ノ申渡ヲ不法トシ上告ノ日ク初審廳ノ指揮ハ業已ニ之ヲ得タリ然ルニ其指揮某上等裁判所ノ判文ニ違ヒシ指揮ナルニヨリ止ムヲ得ヌ其裁判ヲ與ヘラレシ某上等裁判所ニ說明及ヒ救正ヲ乞ヒタリシニ某上等裁判所ノ申渡ノ如クシテ猶又初審廳ノ指揮ヲ要セハ是則チ一廳ニシテ訴訟ヲ覆審スルカ如シ夫レ裁判ハ之ヲ授ケシ裁判所ノ思考ヨリ成立セシ論說ナリ故ニ其論說ノ兩義ニ解釋ス可キ疑義ノ生スル條件アラハ之ヲ兩義中ノ一義ニ決スルトハ原ト裁判セシ裁判所ノ說明ヲ得サレ

出訴



ハ果ノ原裁判所ノ思考ニ適スルヤ否ヤハ傍人之ヲ説明スル能ハサル也故ニ其裁判  
ヲ爲シタル所ヲ以テ本訴ノ管理者ト看認メ其執行ニ係ハル疑議ハ裁判シタル裁判  
所カ當ニ管理ノ説明スヘキ筋ナリト思考ス然ルチ原裁判所ハ之レカ説明ヲ與ヘス  
シテ一概ニ訴狀及ヒ願書ヲ卻ケ強テサキニ非違ノ執行ヲ命シタル地方裁判所ノ再  
ヒ指揮ヲ受ケヘシトノ裁判ハ是其管理ノ本分ヲ行ハサルモノニ付不當ノ申渡シト  
思考シ右ノ申渡ノ破毀ヲ求ムト因テ本院ニ於テ被上告者ヲ召喚シ對審セシムルニ  
果ノ上告ノ如ク彙キニ初審廳ニ於テ指揮ヲナシ已ニ執行ヲ命セシハ原被ノ口供符  
合セリ如此場合ニ於テハ某上等裁判所ハ其與ヘシ判文ノ説明ヲ自カラナスヘキニ  
却テ再度初審ノ指揮ヲ受ケシムヘキ旨裁判セシハ不條理ニ付原裁判所カ却下ノ裁  
判ヲ破毀シ原裁判所ニ於テ彙ノ終決裁判ノ説明ヲ與フヘキモノト判決ヲ下シ不相  
當ノ儀ト考慮致シ候然ルニ上告ニ付裁判ヲ破毀セシ上ハ他ノ裁判所ニ移スノ外原  
裁判所ニ於テ再ヒ審理セシムルトハ異例ナレトモ本件ハ他ノ裁判所ニ於テハ説明  
ヲ與ヘ難キ事件ニ付定例ニハ無之候得共原裁判所ヘ附シ可然哉此段相伺候也

大審院長

明治十一年十月二日

判事玉乃世履

司法卿大木喬任殿

朱書

伺之通

明治十一年十月十六日

○第十八項 控訴書類往返遞送ノミ通運ヲ以テ差出方

明治十二年九月三十日司法省丁  
第二十四號各上等裁判所へ達

控訴書類遞送ノ義別紙之通大審院ヨリ申出之趣モ有之ニ付自今右書類ハ通運ニテ  
遞送可致此段相達候事

〔別紙〕

各上等裁判所ヨリ上告届出候節控訴書類往返遞送費取立方之儀去明治十二年七月  
十一日付ヲ以上申仕八月五日御聞届ノ御達ニ相成リ其後各上等裁判所ニ於テモ右  
御聞届ノ趣ニ相運ヒ候處右控訴書類遞送方ニ付郵便送致ト通運送致ト兩便ニ於テ  
ハ通運賃ハ郵便ヨリ小敷ニ付通運ノ方ニ一定致シ候ヘハ人民ノ幸不少且又本院ニ  
於テモ右ニ付テノ不都合ハ無之事ト存候間控訴書類往返遞送ノミニ限り通運ヲ以  
テ差出方相成候様重テ御達相成度此段上申仕候也

出訴



大審院長

判事玉乃世履

明治十二年九月二十日

司法卿大木喬任殿

〔朱書指令〕

上申ノ趣聞届別紙ノ通各上等裁判所へ相達候事

〔別紙〕

明治十三年七月二十日司法省丁第拾六號各上等裁判所へ達  
函館裁判所

控訴書類遞送ノ儀司法省明治十二年九月丁第二十四號ヲ以テ各上等裁判所へ達置候處右ハ自今郵便ニ附シテ便ナルモノハ郵便ニ附シ通運ニ附シ便ナルモノハ通運ニ附シ且場所ニ因リ其他ノ方法ヲ以テ送致スルヲ得ヘキ向東京上等裁判所ヨリ大  
審院ニ送致スルハ小使  
等ニ附スハ適宜可取計此旨更ニ相達候事

○第十九項 控訴書類遞送方ハ便宜取計ハシメ方 明治十三年七月二十日司法省丁第十六號各上等裁判所函館裁判所へ達

控訴書類遞送ノ儀明治十二年九月丁第二十四號ヲ以テ各上等裁判所へ達置候處右ハ自今郵便ニ附シテ便ナルモノハ郵便ニ附シ通運ニ附シテ便ナルモノハ通運ニ附

シ且場所ニ因リ其他ノ方法ヲ以テ送致スルヲ得ヘキ向東京上等裁判所ヨリ大審院  
ニ送致スルハ小使等ニ附ス  
ルノハ適宜可取計此旨更ニ相達候事

○第十四節 華士族平民身代限規則 明治五年六月二十三日第百八十七號布告

今般華士族平民共身代限規則被相定候條左ノ通相達候事  
但當壬申八月朔日ヨリ施行可致事

華士族平民身代限規則

平民身代限抵償トシテ差押フ可テサル品類

一時服着替共男女共各二通宛

一夜具 男女共各一通宛

一本ノ職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商職業ニ必要ナル書類器械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任ス可シ其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類 一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ町役人ニ於テ總

出訴



入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ事

一 食料

家族ノ人口ヲ量リ一ヶ月間用ヰル飯米ヲ殘シ置ク可キ事

但男丁ハ一日ニ付五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合婦女幼少ハ

四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛ノ事

一 鍋釜及炊具各 一通

華士族身代限抵償トシテ差押フ可ラサル品類

〔五年第三百二十七號〕  
〔布告ヲ以テ本項取消〕

一 大小類 男子一人ニ付各一腰宛

一 冠服 男子一人ニ付各一通宛

一 時服着替共男女共各 二通宛

一 夜具 男女共各 一通宛

一 本人職業ヲ爲スニ必要ナル諸物品

九年第  
三十八  
號布告  
ヲ以テ  
帶刀ヲ  
禁ス

但學藝ヲ人ニ教ヘ又ハ農工商等ノ職業ニ必要ナル書類及諸器  
械品物等其金額五十兩ニ至ル迄最モ本人ノ擇ム所ニ任スヘシ  
其直段ハ貸主借主ヨリ監定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人  
ト共ニ入札致サセ町役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其  
價ヲ定ム可キ事

一 鍋釜及炊具類各 一通

右身代限リノ節ハ六十日間裁判所門前高札場并ニ本人家宅ヘ

揭示ヲ出シ其次第傳承日限中追願ノ者ハ取糾ノ上可處置事

〔六年第七拾號布告ヲ以テ揭示日  
數二十日トアルヲ六十日ト改ム〕

但新聞紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ

一 前條ニ記スル所ノ引殘スヘキ必要物件ノ内未ダ代價ヲ拂ハサ

ル分ハ賣主ヨリ日限内訴出レハ現品ヲ取戻スヲ得ヘシ

但現在着用ノ衣服夜具ハ此限ニアラス

出訴



一身代限ノ物件ハ入札拂ニ出ス可シ尤金銀器等ノ定價判然タル  
物品ハ眞價ヨリ低ク賣拂フヘカラス且ツ賣拂金ノ総額ハ其者  
ノ負債及ヒ右一件ノ諸費用ヲ償フニ過ク可カラス

但入札拂ノ日ヨリ三日前ニ其品物及ヒ場所時刻ヲ裁判所門  
前并ニ其者ノ居宅及ヒ各地士民群集ノ所ヘ揭示シ及ヒ新聞  
紙ヲ刊行スル地ニ於テハ亦之ニ記載セシムヘシ且ツ貸主借  
主ヨリ差出セシ監定ノ者モ他人ト共ニ入札致サセ<sub>町役人</sub>  
ニ於テ総入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定メ之ヲ現金ニテ  
取立裁判所ヘ差出スヘシ

○第十五節 身代限揭示案ヲ更定ス

明治七年七月三日  
第七拾壹號布告

明治六年<sub>五月</sub>第八拾壹號布告身代限揭示案左之通改正候條此旨  
布告候事

何<sub>町</sub>

何 之 誰

右之者儀何<sub>町</sub>何ノ誰ヨリ何々<sub>其事目</sub>出訴ニ及ヒ吟味ノ上身代限  
申付ルニ付若シ何ノ誰ヘ係リ金穀其他諸取引ノ訴有之者ハ當何  
日ヨリ來ル何月何日迄日數六十日內ニ當裁判所ヘ訴出ツヘシ右  
日限過去訴出ルニ於テハ此度身代分散金ノ分配ニハ不差加者也

○第十六節 身代限者ニ對シ貸金等約定期限內處分

六年七月十七日第  
二百五十二號布告

治明

負債者身代限ニ遇フ節其者ヘ對シ貸金穀其他義務ヲ得可キ者定  
約期限未滿内ノ分處置振左ノ通被定候條此旨相達候事

第一條 貸金穀又ハ義務ヲ得可キ者定約期限未滿内ニハ訴出ル  
トナ<sub>ナ</sub>許サ、ル規則ナレ<sub>レ</sub>其負債者又ハ義務ヲ行フヘキ者右期  
限未滿ニ身代限ニ遇フ時ハ訴出ルトナ<sub>ナ</sub>得ヘシ

第二條 定約期限未滿内ニ訴出ル者ハ滿期後訴出ル者ト同一ノ



權利ヲ有シ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ルヲ得ヘシ

八年第  
百二十  
號布告  
ヲ以テ  
金穀貸  
借請人  
證人辨  
償規則  
ヲ定ム

第三條 請人證人等連印ニテ本人返濟相滯ルニ於テハ引受返濟可致ノ明文之レアル證書ヲ取置タル者ハ本人身代限財産糶賣金ノ分配ヲ受ケ尙ホ不足アラハ滿期ノ時ニ至請人證人ニ掛リ之ヲ訴ルヲ得ヘシ

「第二  
編第四  
節ニ掲  
ク」

第四條 身代限ニ遇フ者期限未滿内ノ者ニハ滿期ノ時ニ至リ返濟セント欲スル時ハ別段請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シテ原告人ノ承諾ヲ求ルヲ必要トス

第五條 負債者滿期ヲ保スル爲メ改メテ請人ヲ立請人ヨリ動不動産ヲ引當又ハ質物ト爲シ違變ナキヲ證明シ原告人之レヲ承諾スル時ハ其原告人ハ此回ノ身代限財産糶賣金ノ分配ヲ求ムルヲ得ヘカラス

第六條 定約期限未滿内ノ債主ハ身代限ニ遇フ負債主ニ對シ期限未滿内ニ訴フルモ滿期後ニ至リ訴フルモ其者ノ情願ニ任スト雖モ身代限ニ遇フ者ノ動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取リ置タル債主ハ右動不動産ヲ身代限ノ糶賣ヲ爲スニ付己レノ受取ル可キ金高ヲ求ムルヲ得ヘキ而已ニテ糶賣ヲ爲ス事ヲ拒ムヲ得可ラス

第七條 動不動産ヲ引當又ハ質物ニ取置タル者ハ其財産糶賣金ノ内ニテ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ其定約ノ證書ニ據リ處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ル可キノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ引當又ハ質物ヲ取置タル者ニ分配ス可キ金高ヲ引渡ス可シ

第八條 引當又ハ質物ヲ取置カサル金穀ノ債主定約期限未滿内ニ訴出ル時ハ元金高又ハ利息アレハ利息ト共ニ定約ノ證書ニ

出訴



據り處分ノ時迄ノ金高ヲ算計シ受取ヘキノ求ヲ爲シ裁判所ニ於テハ糶賣金分配ノ規則ニ從ヒ處分ヲ爲ス可シ

○第十七節

身代限財產中質入書入ノ地所處分方

明治八年四月十日

第五十三號布告

地所ノ質入書入ハ尋常ノ私約ト違ヒ戸長役場ノ帳簿ニ記載シテ奧書割印モ之レアル公正ノ證書ニ付若シ身代限リ財產中質入又ハ書入ノ地所アリテ其債主揭示中ニ訴出サル節ハ其地所糶賣代價ノ中ニテ債主受取ルヘキ元金高ニ糶賣金配當ノ日マテノ利息ヲ加ヘ第一番ニ引キ去リ裁判所ニ於テ之ヲ糊封シ掛リ官員兩名調印ノ上戸長役場ニ預ケ置キ後日債主願出次第相渡スヘク候條此旨布告候事

但質入書入ノ金高及ヒ利息等不分明ノ節ハ本人呼出シ取調可申事

○第十八節

異産ノ子弟及ヒ隱居身代限處分方

明治五年九月十八日第

二百七十五號布告

父兄ト同居ノ子弟或ハ別居シテ財產ヲ異ニスルモノ又ハ父既ニ家督ヲ其子ニ讓リ隱居別宅シテ財產ヲ異ニスル者自今一己ニ金銀借受候分其證券中本家ノ戸主保證ノ調印無之上ハ貸主ニ於テ本家ノ財產ヲ目的トシ貸シ與フル筋無之候ニ付若シ右等ノ者共返金相滞訴訟ニ及ヒ候節同居ノ者ハ其身代持ノ品物ノミ分産異居ノ者ハ其財產ノミヲ以テ之ニ當テ身代限リニ裁判申渡候條爲心得此段相達候事

○第十九節

僧侶身代限規則

明治六年三月五日第八十八號布告

僧侶借財滯出入ニ付身代限規則左ノ通被相定候條此段相達候事

僧侶身代限規則

抵償トシテ差押フ可ラサル品類

出訴



一食料

寺内ノ人口ヲ量リ僧侶ハ一日ニ五合麥ハ一升雜穀ハ一升五合尼及婦女幼少ハ四合麥ハ八合雜穀ハ一升二合宛一ヶ月間用フル飯米ヲ殘シ置クヘキ事

一建物

法用ニ必要ナル箇處

但本堂等へ建添候トモ榮耀ニ属スル箇所ハ此限ニテラス

一寄附帳ニ記載スル部分

一什物帳ニ區別シテ記載スル古來傳承ノ寶物並法用ニ必要ナル部分

一法衣寺主並所化及尼共各一通宛

一時服着替共寺主並所化及婦女共各二通宛

一夜具寺主並所化婦女共各一通宛

一鍋釜及炊具類各一通

一本ノ職業ヲ爲スニ必要ナル金額五十兩ニ至ル迄ノ物品ヲ差除ク等其他ノ方法ハ華士族平民身代限ニ同シ

○第二十節 僧侶身代限ニ付寺院所有物處分方

明治六年三月五日第八

十九號  
布告

今般僧侶身代限規則被相定候ニ付テハ寺院所有ノ田園建造物諸器什檀家ヨリ寄附ノ分又ハ法用ニ必用ナル分並ニ古來傳承ノ寺寶等ノ部分判然相立不申候テハ差支候條左ノ規則ニ從ヒ寄附帳什物帳相綴リ置可申候

一寄附帳ニハ何年何月何誰寄附ノ田園反別建造物坪數諸器物ノ質分ニ至ルマテ詳細ニ記載スヘシ

一什物帳ニハ法用ニ必要ノ分並ニ寺寶ヲ區別シ記載スヘシ

出訴



一右二帳二部ツ、相綴リ檀家法類共兩人以上並ニ其地ノ戸長檢  
查ノ上各姓名ヲ署シ之レニ調印シ一部ハ戸長役場ニ藏シ一部  
ハ其寺院ニ藏シ置ク可シ  
右之通相達候事

○第十九項 社寺古來所傳ノ什物類處分方

明治六年七月  
十七日第二百

四十九  
號布告

神社佛寺共古來所傳ノ什物衆庶寄附ノ諸器並ニ祠堂金等ノ類ハ神官僧侶ハ勿論氏  
子檀家ノモノタリ而自儘ニ處分可致筋無之候條若不得已儀有之候ハ、委詳具狀ヲ  
以テ「教部省」ヘ可申立候此旨布告候事

○第二十項 社寺持添田畑山林寄附金等處分心得

明治九  
年二月

二日教部省第  
三號府縣ヘ達

神社佛寺共古來所傳ノ什物等處分ノ儀明治六年七月第二百四十九號公布ノ趣有之ニ  
付テハ持添ノ田畑山林並寄附金又ハ古文書類共總テ右公布ニ照準シ處分可致ハ勿  
論ニ候條此旨爲心得相達候事

○第廿一項 社寺寶物古器物古文書目錄並取締方

明治  
十二

年五月十九日內務省乙  
第二十二號府縣ヘ達

社寺寶物古文書等ノ儀ハ各管廳ニ於テ取締相立厚ク保護可致筈ニ有之就テハ各管  
內府縣社以下神社並寺院共所藏ノ寶物古器物古文書等別紙書式ニ照準取調目錄帳  
爲差出調査之上本年十月限取纏メ當省ヘ可届出此旨相達候事

別紙

書式

某(神社寺院)寶物古器物古文書目錄

一緣起書

幾卷

撰者及ヒ筆者ノ姓名並ニ其年月ヲ記ス

一文書

幾通

百年以上若クハ名家ノ筆ニ係ルモノニテ文書ト稱スヘキ者ハ一々其目ヲ掲ケ

撰者筆者年月寄附人并傳來ノ所由ヲ記ス [以上扁額ニ至ルマテ  
記載方皆之レニ準ス]

一書畫或ハ繪卷物

幾幅或ハ幾卷

絹地紙地彩色墨畫等ノ別ヲ記シ繪詞等記載方都テ前ニ準ス

一寫本或ハ寫經

幾本

出訴



格別貴重ナルモノハ行數紙數等ヲモ詳細ニ記載スヘシ

一扁額 一面

寸法ヲモ記ス

一棟札 一枚

年月日及ヒ人名ヲ記ス

一鏡 一面

銘〔若クハ無〕寸法 形 鑄文 重量 年月寄附人傳來ノ所由等ヲ記ス

〔已下記載方皆之ニ準ス〕

一鈴 一箇

一劔 一口

燒刃器具ノ地金模様〔銘アラハ銘〕等ヲモ記ス

一古金 一枚

一古錢 一枚

一古印 一顆

印文 鈕 形等ヲモ記ス

一甲冑 一副

札威シ毛等ヲモ記ス

一琴 一張

一笛 一管

此他古書籍百年以上若クハ名家ノ筆ニ係ルモノノ古法帖〔明朝摺以上ニ係ルモノ〕武器文具樂器珠玉石劔等ニ至ル迄各部ヲ分ケ類ヲ推シ書式ニ照ラシテ記載スヘシ且其金銀銅器ニ係ルモノハ其重量等詳細ニ記センヲ要ス

右之通御座候也

年月日

何府管下

何國何郡何町

何神社何官何宗

職名

右神社氏子或ハ崇敬人寺院檀家信徒或ハ法類 總代

姓 名 印  
姓 名 印  
姓 名 印

出訴



右町戸長

姓

名

印

右調査候處相違無之候也

年月日

何府印

○第廿二項 社寺ノ什物地所等抵當處分方

明治十二年七月十四日内務省乙

第三十九號 府縣へ達

本年當省乙第二十二號ヲ以テ社寺寶物古文書保護之儀相違候ニ就テハ今般調製スヘキ目錄帳中へ記載ノ物品ハ明治十年第四十三號公布之通抵當ト爲スヘカラサル筋ニ有之依テ自今社寺ニ於テスル抵當ハ氏子檀家協議之書面ヲ以テ一應管廳へ申出サセ調査ノ上全ク寶物古文書ニアラサル分ニ限り認可スヘシ此旨相違候事但目錄帳へ記載セスト雖モ該社寺ニ別段ノ由緒アル地所建物等ハ寶物古文書ニ准スヘク且社寺ノ物件不得已儀有之處分候節ハ明治六年第二百四十九號公布同九年教部省第三號達書之通心得ヘシ

○第廿三項 動不動産取引上敗訴ノ時身代限ノ方法執行

方 明治十五年九月十三日司法省第九號布達

凡ソ動産不動産取引ノ詞訟ヲ審判スルニ原告被告雙方ノ内一方之者負公事ニ決ス

ル時ハ日切濟方申付候上仍ホ不相濟ニ於テハ身代限リ申付候方法ニ有之候處自今日切濟方ノ舊法ヲ廢シ一方ノ者負公事ニ相決直ニ濟方不相成候時ハ身代限之方法ヲ執行可致候事

○第廿四項 負債主身代限處分ノ時他ニ貸附在ル金穀證

文取扱方

明治七年九月四日司法省第二十三號各裁判所、各府縣へ達

金穀ヲ借り返濟ヲ爲シ能ハサル者裁判所ノ處分ニ因リ身代限ニ遭ヒ候トキ所有物ノ内他人へ貸附置キタル金穀ノ證文之レアル節ノ取扱振明治五年壬申第四拾號ヲ以テ相違置候處詮議ノ次第有之左之通改正候條此旨相違候事

第一條 各裁判所ニ於テ身代限ノ處分ヲ爲スニ當リ身代限ニ遭フ者ノ物件ノ内ニ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸付置キタル金穀ノ證文有之時ハ其證文ノ定期期限ノ滿未滿ヲ論セス證文ニ記名シタル負債主へ眞偽ヲ尋ネ無相違時ハ其負債主ヨリ證文面ノ通り可受取旨身代限ニ遭フ者ノ債主へ申渡シ別紙雛形ニ倣ヒ證文ニ裏書ヲ爲シ其債主ニ可相渡事

第二條 前條ノ場合ニ於テ債主其證文ヲ受取ルチ好マサル時ハ其證文ハ身代限ニ遭タル者ニ所持致サセ置クヘキ事

出訴



但シ定期期限ノ證文ニテ負債主ノ家産些少ナルモ身代限ニ遭フ者ノ債主ニ於テソノ負債主ノ身代限ヲ以テ現金ノ割賦ヲ受度旨申立ルニ於テハ望ノ通處分スヘキ事

第三條 債主數名ニシテ身代限ニ遭フ者ヨリ他人へ貸附置キタル金穀ノ證文壹通又ハ數通ナル時ハ數名ノ債主ニ入札致タサセ落札ノ金員ヲ以テ其落札シタル債主ト其他ノ債主トへ金高ニ應シ配當シソノ落札ノ證文ニハ壹通毎ニ第一條ノ方法ニ據リ處分スヘキ事

但シ數名ノ債主盡ク入札ヲ好マサル時ハ第二條ノ處分ニ及フヘキ事

第四條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取リタル時ハ其金員中ヨリ己レノ受取ルヘキ金高ト之レヲ受取ニ付テノ諸入費ノ金高トヲ引去リ其餘金ハ證文ニ記載シタル債主ニ返シ而シテ右ノ計算ヲ爲シタル明細勘定書ト餘金ヲ返シタル請取書トヲ以テ裁判所ニ届出ツヘキ事

第五條 若シ證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ントスルニ證文ニ記名シタル負債主モ亦タ身代限ニ遭ヒテ證文ニ記シタル金員ノ全部又ハ幾部ヲ返シ能ハサルトキハ證文ニ記名シタル負債主ヨリ證文ヲ落札シタル

債主ニ對シ右ノ部分ノ金員ヲ身代持直次第返濟スヘキ旨ノ證文ノ裏書ヲ裁判所ヨリ受取ルヲ得ヘキ事

但此時還ニ身代限ニ遭タル者ノ裏書證文ヲ持出ヘシ裁判所ニ於テハ之ニ金員ノ差引ヲ記載シ二通ノ證書ヲ一綴ニシテ下附スヘシ

第六條 證文ヲ落札シタル債主證文ニ記名シタル負債主ヨリ金ヲ受取ルヘキ期限ニ至ラサル時證文ニ記載シタル債主即チ還ニ身代限ニ遭ヒシ人己ニ身代ヲ持直シタルトキハ直ニ其人ニ對シ再ヒ金穀ノ返濟ヲ請求スルヲ得ヘキ事

證文裏書雛形

表書ノ貸主何ノ誰義年號月日身代限申付候ニ付此證文ハ入札ヲ以テ渡ス時ハ此間加フ某府縣管下某國某郡某村何之誰へ相渡候條此證書ノ金額ハ右何之誰へ濟方致ヘシ其段當裁判所へ可届出事

年號月日

某裁判所印

○第廿五項 裁判所ニ於身代限又ハ抵當物公賣處分及其

取消ノ時登記所ニ通知

明治二十年三月十四日  
司法省訓令第十二號裁

所判

裁判所ニ於テ身代限又ハ抵當物公賣ノ處分ヲ爲ス時ハ其地所建物船舶所在地ノ登

出訴



記所ニ其旨ヲ通知ス可シ其處分ヲ取消ス時亦同シ

○第廿六項 裁判所ニ於身代限處分又ハ抵當物公賣處分

ノ未落札登記所ニ通知  
明治二十年十月二十五日  
司法部訓令第二十三

號裁  
判所

裁判所ニ於テ身代限處分又ハ抵當物公賣ノ處分ヲ爲シ及ヒ其處分ヲ取消ス時ハ其地所建物船舶所在地ノ登記所ニ其旨ヲ通知ス可キ儀ニ付本年三月十四日附テ以テ訓令ニ及タル處右處分ノ未裁判所ニ於テ落札ヲ達タル時モ亦其旨及落札人ノ氏名ヲ該登記所ニ通知ス可シ

○第廿七項 華族及ヒ華族ノ子弟身代限處分濟宮內省爵

位局へ通牒方  
明治十八年十一月十二日司法部丁第  
二十五號始審裁判所治安裁判所へ達

民事裁判上ニ於テ華族及ヒ華族ノ子弟身代限處分ニ及ヒタル者有之候ハ、處分完結ノ上其旨直ニ宮內省爵位局へ通牒可致此旨相達候事

○千葉縣伺 (十六年七月五日)

一身代限財産取調及公賣ノ節原告ニ於テ立會フヘキ成規ハ無之候得共右ハ各自ノ利害ニモ關シ候儀ニ付自ラ立會候ハ妨ケ有之間敷且千葉始審裁判所ニ於テハ別紙寫ノ通原被告連署ノ書面ヲ徴シ來リ候趣ニ有之然ラハ財産取調及公賣ノ當

日雙方立會候ハ勿論ノ儀ニ付之ヲ執行スル郡長又ハ戶長ヨリハ原告へ立會ノ儀特ニ達スルニ及ハサル儀ト心得可然哉

一果シテ然ラハ財産取調及公賣ノ節原告雙方若クハ其一方ノ者出會セサル場合ニ於テハ之ヲ執行スル郡長又ハ戶長ニ於テ直ニ其處分ヲ完結スルモ妨ケ無之哉  
一人民相互ノ訴訟ニヨリ抵當物公賣ニ付テモ前二項ノ通心得可然哉  
右相伺候條速ニ御指令有之度候也

○司法省指令 (十六年七月十九日)

伺之趣左ノ通り

第一項 立會ノ儀ハ達スルニ及ハスト雖モ財産取調及公賣ノ期日ハ報告スヘキモノトス

第二項 財産取調ノ節被告人立會サルハ家族又ハ隣佑ノ者ヲシテ立會シムヘシ原告人立會サルハ其儘ニテ取調ヲ爲スコトヲ得財産公賣ノ節ハ原告人共立會ハサルト雖モ其處分ヲ了スルヲ得ヘシ

第三項 抵當物公賣ニ付テモ身代限財産公賣ト同様心得ヘシ

○千葉縣伺 (十六年七月九日)

出訴



凡ソ一村又ハ一部落若クハ數人共有ノ物件ハ各自財産ニ算入スヘカラサルヲ以テ其一人身代限ノ場合ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニ無之哉  
右相伺候條速ニ御指令有之度候也

○司法省指令 (十六年七月十九日)

伺之趣一村又ハ一部落ノ公有スル物件ハ其村內若クハ部内ノ一人身代限處分ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニアラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツ可ラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトス

●千葉縣伺 (十六年八月三日)

身代限財産取調之際共有物件差押方ノ儀客月九日相伺同十九日御指令相成候處右ハ數人ノ共有ニシテ其分ツ可ラサル物件ハ全部ヲ公賣ニ付シ其代價ハ共有者ニ分割シ身代限ヲ爲ス者ノ分ノミ其債主ヘ之配當金ニ加フルハ勿論ナルヘシト雖モ若シ他ノ共有者ヨリ其物件代價ノ一部即身代限ヲ爲ス者ノ分ヲ辨納スルニ於テハ固ヨリ公賣ニ付スルニ及ハサル儀ト存候得共爲念相伺候條至急御指令相成度候也

○司法省指令 (十六年八月二十日)

伺之通

●栃木縣伺 (十六年八月八日)

負債者身代限ノ處分ヲ受ケ財産取調ノ際無謂差拒ミ又ハ一時所在ヲ晦匿スルニ方リ處分方昨十五年八月中相伺候處戸長又ハ債主ヨリ其裁判所へ申出處分ヲ受ク可キ旨御指令有之然ルニ官報第十九號千葉縣伺第二項被告人立會サルルハ家族又ハ隣伍ノ者ヲシテ立會シメ其處分ヲ了スルヲ得可キ旨御指令ノ趣相見ヘ前顯當縣伺ノ旨趣トハ聊カ異ナル儀トハ存候得共畢竟所在ヲ晦匿スル等ノ所爲ハ時日ヲ遷延シ其財産ヲ賣却シ或ハ隱匿スルノ故意ニ出ルモノニシテ實際上不都合不尠殊ニ郡長職制中ノ件ニ付右等ノ場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ待タス其家族又ハ親族若クハ隣伍ノ者立會シメ直チニ取調可然哉此段相伺候也

○司法省指令 (十六年八月二十三日)

伺之通

●福井縣伺 (十六年八月十一日)

官報第十九號ニ掲載有之千葉縣ヨリ身代限財産取調之際共有物件差押方ノ儀ニ付御省へ稟請候處其御指令ニ曰ク一村又ハ一部落ノ公有スル物件ハ其村內若ク出訴



ハ部内ノ一人身代限處分ニ遭フモ之ヲ差押フ可キ限ニアラスト雖凡數人ノ共有ニシテ分ツ可カラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトスト有之右御指令ノ旨意ハ公有ト私有トヲ大別サレタル儀ニテ假令分別シ得ル物件ト雖モ一村若クハ一部落ノ公有タル上ハ差押ユルヲ得ス亦假令分別シ能ハサル物件ト雖モ私有タル上ハ可差押旨ヲ示サレタル儀ニ候哉聊疑似ニ涉リ候間否仰御指令候也

○司法省指令 (十六年八月三十一日)  
伺之通

●栃木縣伺電 (十六年九月十日)  
報

身代限財産調ノ際本人ハ勿論家族親族及ヒ隣家之者マテ立會ヲ拒ム時ハ戸長ニテ直チニ取調可然哉至急御指揮ヲ乞フ

○司法省指令 (十六年九月十九日)

身代限財産調ノ儀ニ付伺之趣ハ見込ノ通タルヘシ但シ戸長ニ於テ財産調書ニ本人等立會ヲ拒ムニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

●佐賀縣伺 (十六年十月一日)

一隱居及ヒ尊族ノ動不動産ハ同居別居ヲ不問戸主身代限ニハ連及セサル者ト心

得然ル可キ哉

一子弟及ヒ昇族ノ動不動産モ亦尊族ノ財産ト同様心得然ル可キ哉

一妻ノ動不動産ハ戸主ノ財産ニ加ヘ然ル可キ哉

一以上ノ財産之ヲ區別スルモノニ候ハ、條例成規アル簿冊ニ記名アルモノハ勿論建物船舶等ノ如キ賣買讓與ノ規則アリテ公證ヲ受ケタルモノ及ヒ現ニ其所有ヲ證スルニ足ルモノヲ以テ區分スヘキヤ

右差掛候儀之レ有候ニ付至急御指揮相成度此段相伺候也

○司法省指令 (十六年十月二十九日)

伺之趣家族ノ財産ハ同居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所及ヒ賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

●佐賀縣伺 (十六年十月八日)

身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ差拒ミ候者アルハ裁判執行ヲ拒ム者ニ付戸長ヨリ直ニ裁判所へ出訴爲致來候處官報第七拾壹號栃木縣伺ニ對スル御指令ニ依レハ身代限ノ處分ヲ受ケル本人ハ勿論其家族親族及隣伍ノ者ニ於テ立會差拒ミ候場合ニ於テハ戸長直ニ取調ノ手續ヲナシ其旨調書ニ附記可致旨ニ有之聊

出訴



カ疑義相生候條爲念此段相伺候也

追テ裁判所へ出訴ヲ要セス戸長ニ於テ直ニ調査スル儀ニ候ハ、若シ本人又ハ代理人等ニ於テ其調査ニ故障ヲ唱差拒候節ハ戸長ヨリ直ニ警察官ノ公力ヲ要スル儀ニ候哉又ハ此場合ニ於テ裁判官へ通知スル儀ニ候哉合テ御指令相成度候也

○司法省指令 (十六年十月三十一日)

身代限財産取調ニ際シ無謂其取調ヲ拒ム者アル時ハ戸長ニ於テ直ニ警察官ニ對シ公力ヲ要求スルコトヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求ムヘシ

但栃木縣伺ニ對スル指令ハ立會ヲ差拒ム場合即チ立會サル時ノ處分ヲ示シタルモノト心得ヘシ

●和歌山縣伺 (十六年十月二十三日)

第一條 茲ニ刑事ニ關シ乙ヨリ甲ニ對シ告發ヲ爲シ裁判所ニ於テ豫審ノ末無罪ノ申渡ヲ受ケタルモノアリ因テ茲ニ甲ハ乙ヲ被告トシ損害要償ノ訴ヲ爲シ乙ハ其損害ヲ償フヘキノ申渡ヲ受ケタリ然ルニ乙ハ其償ヲナサス所有財産ノ幾

分ヲ長男丙同籍中ノ者ニテ未タ戸主ノ地位ヲ讓テス單ニ財産ノ幾分ヲ讓與スヘ讓渡シタル後損害金ノ幾分ヲ償却シ其不足金渡シ方延日ヲ求ムルモ甲之ヲ肯シセス終ニ裁判執行ノ訴ヲナ

シ原被示談身代限ノ申立ヲ爲セリ右身代限財産處分ノ上償金ニ不足ヲ生スルモ曩ニ丙長長ヘ讓渡シタル記名ノ財産ニハ及ホサル儀ニ候哉

第二條 前同様ノ事實ナル無記名ノ財産ハ戸主ノ身代限ニ組入ルヘキ儀ニ可有之哉

○司法省指令 (十六年十一月十日)

伺之趣左之通心得ヘシ

第一條 償金ニ不足ヲ生スルモ甲ハ丙ニ對シテ更ニ辨濟ノ請求ヲ訴ルヲ得ヘシ

第二條 見込ノ通

●山梨縣伺 (十六年十月二十日)

官報第十九號伺指令ノ欄内千葉縣ノ伺ニ對シ御省ノ御指令ニ一村又ハ一部落ノ公有物件ハ其村内若クハ部内ノ一人身代限ノ處分ニ遭フモ之ヲ差押フヘキ限ニ非ラスト雖モ數人ノ共有ニシテ分ツヘカラサル物件ハ之ヲ差押フヘキモノトス  
出訴



ト有之候處右ハ今後右御指令ニ依リ取扱可然哉

○司法省指令 (十六年十一月二十二日)

伺之通

●三重縣伺 (十六年十一月十九日)

官報第百四號中ニ佐賀縣ヨリ戸主身代限ノ際非戸主ノ財産處分之儀御省ヘ伺指令登載有之右御指令ニ家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス公證記名アル公債證書地所及ヒ賣買讓與ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトストアリ然ルニ村邑僻地ニ至テハ伯叔父母兄弟等籍ヲ分タスシテ別居シ毫モ本家ノ保護ヲ受ケスノ活計ヲ營ミ自力ヲ以テ産ヲ興シ恰モ一戸獨立ノ姿ヲ爲ス者往々有之若シ此等ノ者ヲシテ戸主ノ身代限ニ連及セシムルモノトセハ多年ノ盡力一朝水泡ニ屬シ其憫諒スヘキモノアリ右等ノ如キ單ニ戸主ト其籍ヲ同フスルノミニテ其實絶テ本家ト經濟ノ關係ヲ有セス一家獨立ノ姿ヲ爲ス者ハ其所有ヲ證スルニ足ルモノニ限り戸主ノ財産ニ組込マサル儀ト心得可然哉

○司法省指令 (十六年十二月十二日)

伺之趣別居生計ヲ立ルト雖モ分籍セサル者ノ財産ハ公證記名アル公債證書地所

及ヒ賣買讓與ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキモノトス

●福島縣伺 (十六年十二月五日)

第一條 茲ニ前戸主某甲アリ其戸主中ニ爲シタル負債後戸主乙某ニ於テ引受ケ身代限濟シ方承諾ス然ルニ曾テ債主ニ差入アル證書ハ甲者ノ名面ニシテ其抵當タル土地ノ如キモ甲者ノ所有戸主換ノ節讓渡ナルニ由ル分ナルモハ右負債ハ假令乙者ニ於テ代辨スルニ至レリト雖モ債主ヲシテ信ヲ置カレタル其抵當物件ハ財産取調ニ組入レ可然乎又ハ乙者カ甲者ニ代リ其義務ヲ盡スコトテ原告人承諾セシ上ハ現ニ甲者ノ記名アル地券ノ如キ其調ニ不組入儀ニ候哉

第二條 身代限リ入札之節入札上ノ價格不適當ト見認ムル場合ハ之レヲ取消シ再入札ヲ爲サシムルヲ得ヘキヤ果シテ得ルモノトセハ其權限ハ揭示書ヲ發シタル裁判所ニ屬スルヤ將々郡長ニ屬スルヤ

○司法省指令 (十六年十二月二十五日)

伺之趣左ノ通心得ヘシ

第一條 乙者代償ノコト債主ノ承諾ノ上ハ後段見込ノ通り

出訴



第二條 再入札セシムルヲ得其權限ハ裁判所ニ屬ス

●福島縣伺 (十七年二月三十一日)

戸主身代限ニ係リ候節家族ノ財産ハ其同居別居ヲ問ハス公證記名アル公價證書  
地所及賣買讓渡ノ規則アル建物船舶ヲ除クノ外總テ戸主ノ財産ニ組込ムヘキ旨  
曾テ御指令ノ次第モ有之右御旨趣ニ基クキハ戸主身代限ニ付財産取調之際同人  
ノ子弟ニシテ他方寄留出稼キ或ハ官員奉職中ニテ相應ノ資産ヲ所有スルモノア  
リ是等ノ者戸籍上ヨリ見ルキハ分籍シタルモノニ非サレハ無論一家庭中ト見認  
メサルヲ得ス右一家族タル以上ハ該子弟ノ財産ニ推及可取調儀ハ勿論之事ト被  
考候得共聊カ疑義ニ涉リ候條此段相伺候也

○司法省指令 (十七年二月十九日)

伺之通

●兵庫縣伺 (十七年二月二十六日)

父隱居或ハ長次男ニシテ戸主ト同居スル者一己之負債ヨリ身代限處分ヲ受ケル  
ニ當リテハ單ニ一身所有品ニ限り公賣處分ヲ受ケ戸主ノ財産ニ及ハサルハ勿論  
ニ付假令本人ニ隨屬シタル妻子アリト雖モ均シク一戸主經濟中ニ生活スル者ナ

レハ妻子所有品ニモ波及セサル筋ト考量候得共若シ同戸籍ニシテ異居分産ノ者  
ニ候ハ、自然財産上分界相立候儀ニ付妻子所有品ト雖モ記名アル公價證書地所  
及口賣買讓渡ノ規則ヲ履ミタル建物船舶ヲ除クノ外總テ本人身代限財産ニ組込  
ムヘキ筋ト心得可然哉

○司法省指令 (十七年三月十二日)

伺之趣戸主ト同籍ニシテ異居分産セル隱居又ハ長次男ニシテ身代限ニ遇フト雖  
モ其妻子ノ所有品ハ隱居又ハ長次男ノ財産中ニ組込ムヘキ限リニアラス

●札幌始審裁判所檢事伺 (十七年三月五日)

諸規則違犯者無資力ニシテ追徴金ヲ完納シ能ハサルキハ民事裁判官ニ於テ檢察  
官ノ請求ニ因ヨリ民事ノ規則ニ從ヒ身代限ヲ以テ追徴ノ處分ニ及フヘキハ勿論  
ナリト雖モ其追徴法ハ被告一身ニ止メ其子孫ニ及ホストヲ得サルモノナル乎又  
ハ通常民事身代限ト同ク子孫ニマテ及ホスヘキモノナル乎若シ前段ノ如ク一身  
ニ止ルモノトスル時ハ被告カ既ニ他ニ抵當質入ト爲シタル財産ヲ除クノ外其公  
賣代金ハ先取特權アル者トスレハ無論六十日間ノ揭示ヲ須ヒス直ニ其財産ヲ公  
賣ニ付スヘキモノニ候哉

出訴



○司法省指令 (十七年三月二十一日)

伺之趣總テ民事身代限ノ規則ニ從ヒ處分シ其財産公賣代金ハ他ノ債主ト平等ニ分配スヘキ者トス但檢察官ニ於テハ違犯者ノ資力生スル迄其處分ノ請求ヲ延期スルコトヲ得

●長崎始審裁判所平戸支廳檢事請訓 (十七年二月二十五日)

茲ニ身代限ニ際シ財産ヲ藏匿脱漏シ而シテ其所爲告訴ニ係リ豫審中ナル處相當ノ手續ヲ經テ其身代限ヲ取消ス者アリ斯ノ如キハ財産取調ノ際一時之ヲ藏匿脱漏スト雖モ既ニ其負債ヲ悉皆辨償シ毫モ債主ニ損害ヲ與ヘスシテ身代限ヲ取消シタル以上ハ之ヲ家資分産ト謂フヘカラス隨テ藏匿脱漏ノ結果ナキ者ナルヲ以テ刑法第三百八十八條ノ間フ處ニ非サル乎將々一旦藏匿脱漏セシ以上ハ假令家資分産ノ取消ヲ爲セシト雖モ該條ニ照依シ問罪スヘキ哉

○司法省内訓 (十七年三月二十四日)

身代限ニ際シ一時財産ヲ藏匿脱漏シタル者處分ノ件請訓ノ趣右ハ揭示期限中ニ負債ヲ償却シ身代限ヲ取消シタル時ハ刑法第三百八十八條ヲ適用スル限リニ在ラス此旨及内訓候也

●福島縣伺 (十七年三月十一日)

第一條 官報第四拾四號ヲ閱スルニ明治十六年八月一日千葉縣ヨリ身代限財産取調之際中署數人共有ニシテ其分ツ可ラサル物件ハ署他ノ共有者ヨリ其物件代價之一部即身代限ヲ爲ス者ノ分納スルニ於テハ公賣ニ付スルニ及ハサル義ト存候云々伺へ同年同月二十日伺之通ト御指令相成抑モ公賣ニ付スルニ不及トハ如何ナル手續ヲ以テ物件代價ヲ相定候趣旨ニ可有之哉凡物品代價至當ノ價額ヲ得ント欲スルニハ公賣ト評價ノ二途ニアルナラン果シテ然ラハ御指令ノ趣旨ハ自然評價爲致義ニ可有之哉

第二條 前條果シテ評價ナリトセハ該評價人二名以上ハ適宜郡長ヨリ命シ之レガ日當料ハ村費等ト同シク身代限財産中ヨリ前收ス可キ者ニ候哉又ハ元來評價人ヲ命スルヤ原告ノ爲メニアラスシテ他ノ共有者ノ如何ニ依リ之ヲ要スル者ナレハ之カ費用ハ自然共有者ノ負擔ニ可有之哉或ハ命セシ郡役所ヨリ支給候義ニ可有之哉

○司法省指令 (十七年四月二日)

伺之趣ハ左ノ通

出訴



第一條 共有者辨納申立ノ代價ニ對シ原被告異論アルニ於テハ評價セシムヘキ  
モノトス

第二條 評價人ノ日雇賃ハ共有者ヨリ辨納ノ代金又ハ財産公賣金ノ内ヨリ支出  
スヘキモノトス

●福島縣伺 (十七年三月十九日)

第一條 戸主身代限ノ處分ヲ受ケタル時其子弟ニシテ他方寄留官途奉職等ヲ爲  
シ相應ノ資産ヲ有スル者ハ俱ニ其財産ヲモ取調フヘキ旨ハ會テ御指令ノ次第  
モ有之候處然ル場合ニ於テ該財産之取調方ハ先ツ郡長ハ裁判所ヨリノ照會ニ  
依リ本籍戸長ヲ取調<sub>テ寄留等有否</sub> 若シ分居<sub>同</sub>者有之片ハ本管郡長ヨリ寄留  
地郡長ニ委囑取調ヲ完結スヘキ順序ニ可有之哉

第二條 明治五年第百八十七號公布華士族身代限規則中外入札人ト共ニ入札爲  
致<sub>町</sub>役人ニ於テ總入札ヲ比較シ高札ヲ以テ其價ヲ定ム可キ云々ト有之候處府  
縣官職制中地方ノ事務郡區長ニ於テ處分シテ後知事令ニ報告スルヲ得ルノ項  
目即チ其第三項ニ依リ身代限ノ財産取扱ノ事ハ既ニ郡長ノ事務ニ屬セラレ候  
上ハ前規則ノ<sub>町</sub>付役人ハ現今之郡長ニ於テ査定ス可キ筋ト心得可然哉

第三條 財産取調之際正當ノ事由アリテ立會ヲ要セス取調ヲ完結スル片債主預  
分主等ヨリ其家内ニ存在スル物品ノ中返還ヲ求ムルモ戸長ハ其處辨ヲ爲ス可  
キモノニ無之旨ハ會テ御指令有之候處尋常<sub>被告</sub>立會<sub>人</sub>取調ニ際シ<sub>債主</sub>預分<sub>主</sub>ニ於  
テ該物品ハ貸借預ケ預リ等之旨ヲ以テ相對ニテ持去ル片ハ取調ニ臨ミタル官  
吏ト雖モ之ヲ支ユヘキ權理無之哉又ハ其家宅ニ臨ミタル以上ハ證據ノ有否ニ  
不拘持去ルコト止メ取調ハ一旦結了シ其返還之處分ハ盡キノ御指令ニ基キ請  
求スル者自ラ裁判所ヘ可申出義ト心得可然哉

○司法省指令 (十七年四月五日)

伺之趣ハ左ノ通心得可シ

第一條 裁判所ニ於テ其子弟寄留地ノ郡區長ヘ照會シ取調ヲ爲サシムヘキモノ  
トス

第二條 見込ノ通

但郡長ハ裁判所ノ認許ヲ得サレハ直ニ落札ヲ達スルノ權ナキモノトス  
第三條 後段見込ノ通

●大阪府伺 (十六年十二月二十六日)

出訴



第一條 負債主身代限ニ際シ他人ノ田地ヲ小作スルモノアリ元來小作米ハ其土地作徳ノ幾分ヲ以テ地主ニ納ムルノ習慣ニシテ尋常貸借トハ自カラ性質ヲ異ニスルニヨリ右身代限ノ節其地ノ立毛ハ先一番ニ地主ニ納ムヘキ小作米金ヲ見積チ以テ引去リ然ル後其餘分チ身代限財產點數ニ附立可然哉

第二條 前條財產附立前之ヲ引去ルヘカラサルモノトスルモ負債主財產公賣金ノ内右立毛ニ對シテハ地主ニ於テ特ニ先取ノ權チ有シ候哉

第三條 借地ニ建テアル建物ヲ他ヘ書入質又ハ賣渡チ爲サントスルニ地主ニ於テ借地料延滞チ名トシ之カ貸地タルヲ證スルノ與書ヲ拒ムチ得ヘキ哉

第四條 甲ヨリ乙ヘ建物ヲ書入質トシ定期限中右地所チ丙ヘ賣渡スルハ是キニ甲ヨリ乙ヘ差入タル證書ヘ新タニ丙ノ與書チ爲サシメ而シテ戸長役場ノ書入質記載帳ニ割印チ爲スヘキヤ又ハ假令丙ニ於テ新タニ與書チ爲サトルモ最前甲ヨリ乙ヘ差入タル證書ハ丙ノ與書チナルト同一ノ効力チ有スヘキ儀ニ候哉

第五條 前條若シ丙ニ於テ新タニ與印スヘキモノナル時ハ已ニ建物書入質約定期限經過スルモ尙與書スヘキ儀ニ候哉

○司法省指令 (十七年五月十日)

書面伺之趣左ノ通可心得事

第一條 小作地ノ作物ハ身代限處分上之ヲ公賣スヘキ時期迄ニ成熟スヘキ者ニアラサレハ差押フ可カラス又地主ヘ納ムヘキ小作米金ヲ見積チ以テ引去ルヘキモノニアラス

第二條 地主ハ作物ニ對シ先取權チ有スルモノトス

第三條 以下事實ニ就キ伺出ヘシ

●宮城縣伺 (十七年五月二日)

所有主死亡相續人未定ノ財產チ其家族ノ負債辨償ノタメ公賣シ得ルヤ

○司法省指令 (十七年五月八日)

五月二日付伺ハ家族ノ負債辨償ノ爲メ前戶主ノ財產チ公賣スルチ得サル儀ト心得ヘシ

●千葉縣伺 (十七年四月二十六日)

客年十一月二日付官報第百六號身代限財產取調ノ儀ニ付佐賀縣ヨリ御省ヘ伺ノ御指令ニ身代限財產取調ニ際シ無謂其取調チ拒ム者アルハ戸長ニ於テ直ニ警出訴



察署ニ對シ公力ヲ要求スルヲ得尤モ其取調ニ付故障ヲ唱フル者アル場合ニ於テハ裁判所ノ處分ヲ求ムヘシト有之右故障ヲ唱フルトハ此物品ハ他ヨリ借受ケタルモノニ付財産調書ニ差加ヘキモノニアラスト申出ルモノ等ヲ指シタル儀ニ候哉右ハ假令他ヨリ借受ケタルモノト申出ルモ其家屋内ニアルモノハ財産調書ニ差加ヘ裁判所ニ送付スヘキ儀ト相心得居候然ルニ前御指令ニ據レハ裁判所ノ處分ヲ求メタル上財産取調ヲナスモノト如シ疑義決兼候ニ付此段相伺候也

○司法省指令 (十七年五月二十三日)

伺之趣他人ノ所有ニ係ル旨ノ申立アル物品ト雖モ之ヲ財産調書ニ記入シ且ツ其申立アル旨ヲ附記シテ裁判所ニ送付シ該物品ノ處分方ヲ求ム可キ儀ト心得ヘシ

●札幌縣伺 電報 (十七年四月二十九日)

身代限財産ノ内證券印紙郵便切手等所持スル者有リ右公賣ニ附スヘキヤ又ハ義務者ヨリ願ヒ出サセ官廳ニテ一割引ヲ以テ買上ヘキヤ

○司法省指令 (十七年五月二十三日)

身代限財産ノ取扱ニ付四月二十九日付伺ノ證券印紙野紙ハ地方廳ニテ原價ト引換郵便切手ハ驛遞本分局へ廻シ郵便條例第三十六條第三十七條ノ處分ヲ請フヘ

シ

●和歌山縣伺 (十七年五月八日)

第一條 身代限財産差押ニ際シ本人及家族不在ノ節ハ隣佑ノ者ヲシテ立會セシメ若シ隣佑者之ヲ肯セサルトキハ戶長ノミ立會セシメ其取調ヲナスモ不苦候哉

第二條 身代限ノ處分ヲ受ケタル節本人職業ヲ爲ス必用ノ書類並ニ器械物品等其金額五拾圓ニ至ル迄ハ引殘スヘキ筈ニ候處其五拾圓以上ナル片ハ貸主借主ヨリ鑑定ノ者道具屋ノ類一人宛差出シ外入札人ト共ニ入札致サセ總入札ヲ比較シ

高札ヲ以テ其代價ヲ定ムヘキ時ノ費用ハ總テ借主ニ於テ負擔スヘキ筋ニ候哉  
第三條 前條ノ場合ニ於テ貸主他郡區ニ涉リ鑑定人ヲ要スルモ一時難呼寄片ハ差押人ノ見込ヲ以テ其土地相應ノ者ヲ撰ミ鑑定爲致候モ不苦候哉

○司法省指令 (十七年五月二十六日)

伺之趣ハ左ノ通

第一條 郡長又ハ戶長ニ於テ直チニ取調ヲナス可キモノトス但調書ニハ本人等立會ヲ拒ミタルニ付直ニ取調ヲ爲シタル旨ヲ附記スヘシ

出訴